

Vol. **186** 2023.秋



MOKUME



艶やかな秋の夜に
笑みがふちます。

特集

《第26回》

作文コンクール表彰式

連載

【がんばる企業訪問記】

株式会社いちい



一般社団法人

日本木造住宅産業協会

CONTENTS

木 芽 Vol.186

秋号

令和5年(2023年)
12月5日発行

書家・文字文化文筆家 宇佐美 志都



折々のひとひら 1



第26回 木のある暮らし 作文コンクール表彰式をオンラインで開催 . . . 2

木住協NOW

「令和4年度自主統計および着工統計の分析報告書」まとまる 13

「木造ハウジングコーディネーター資格試験講習会」を実施 15

生産技術委員会 視察レポート 16



会員会社ニュースがんばる企業訪問記／株式会社いちい(島根県) 17



木造ハウジングコーディネーター奮闘記／住友林業株式会社 中野豊次さん 21



日本の世界遺産探訪／大阪府 仁徳天皇陵古墳 23

都市型木造5階建て住宅と団地再生の集会所の視察で木造住宅の新たな可能性を現地で体感(神奈川支部) . . . 25

資材・技術委員会主催 研修見学開催(近畿支部) 27

第34回 幹事・運営委員合同 研修見学会(近畿支部) 31

支部だよ

令和5年度 第2回 幹事・運営委員合同委員会を開催(近畿支部) 35

北陸支部「令和5年度 夏の講演会及び懇親会」を実施(北陸支部) 36

「歴史的建築物等」の研修見学会(九州支部) 37

生き生き森の探検隊活動記録(九州支部) 40

木住協NOW

新規会員紹介 43



木の匠 Historia / 櫻井家住宅(島根県奥出雲町) 45

『大』 人の正面を象った象形

秋は、大きく実ったことを実感する季節

自分への控えめな心持ちは、冬眠させて、秋は、自分の実りを褒める時期とし、新年や春先への力としたところ。

世の中も、大きく動き出している。そのような時にこそ感じることは、やはり人と人とのつながり。

じんわりじんわりと、円が広がるように描かれてきた人の縁は、柔軟且つ強い。また、点と点のようにあった個々と思っていたことが、つながっていたことに気づくこともある。日進月歩の先端技術が、社会インフラを創造してくれているが、それを司っているのも、実在する人という個があつてのこと。個の集大成が、次の大いなる時代の潮流を生み出してくれる。

人は、正面からあるべきだと、常々、思ってきた。

時に、それは向こう見ずの真つ向勝負で、構えを知らぬ幼子のように映るかも知れないが、漢字が産声をあげた古へでも、人の正面を象った姿は、人の象徴的な姿とされていた。漢字『大』は、人の正面を象った象形文字。一画目で、両腕を一本で表現し、二画目で、頭から右足を描き、三画目は、左足を意味する。人としての自分の成長を実感する為にも、まずは、自分で自分の正面と向かってみる。自分の正面の姿と、真つ向から対峙し、自分の実りを素直に祝う。一段一段を、実感することが、積み重なった幾重もの段となり、それは無限の大きさへと、仲間と共に育まれていくはず。

自分の成長を褒め、大きな自分への次の道を選びたい。

折々のひとひら

第26回

木の^きあるくらし

だつ たん そ しゃ かい
脱炭素社会
SDGs の実現を
かんが えるき づかけに!

作文コンクール

表彰式をオンラインで開催



今年も「木の^きあるくらし」作文コンクールの表彰式を10月28日(土)に執り行いました。表彰式は、昨年同様オンライン形式での開催となりました。

小学校の児童を対象に、周りにある木の^きことについての作文を募る本コンクールも、今回で26回目の実施となり、国内688校に加え、特別支援学校11校、海外からも昨年に続き、ニュージーランドをはじめ4カ国4校からの応募があり、合計4792点の作品が寄せられました。

この中から厳正な審査を経て国土交通大臣賞、文部科学大臣賞、農林水産大臣賞、環境大臣賞、外務大臣賞の大臣表彰をはじめ、住宅金融支援機構理事長賞、日本木造住宅産業協会会長賞、朝日小学生新聞賞、審査員特別賞など入賞19作品、木住協ブロック賞20作品、佳作32作品、特別賞16作品が決定しました。また、最優秀団体賞1校と優秀団体賞4校も選出しました。

表彰式では、来賓として国土交通省住宅局住宅生産課 山下英和課長、審査員長はせがわゆうじ先生、木住協として市川晃会長、加藤永専務理事がライブ会場に出席し、受賞者27名の皆さんにはリモート参加していただきました。



5月より小学生対象の 「木のありくらし」 作文募集を開始

「木のありくらし」作文コンクールは、木造住宅や木材の計画的な利用が地球環境に与える好影響を訴えるとともに、日本の住文化の原点ともいえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくため、平成10年から国土交通省が主唱する10月の住生活月間の関連行事の一環として木住協が主催しています（主催：一般社団法人 日本木造住宅産業協会 後援：国土交通省・文部科学省・農林水産省・環境省・外務省・住宅金融支援機構・朝日学生新聞社）。今回の作文コンクールは、2023年5月15日、木住協のホームページに開催内容を掲載したことを皮切りに、全国の小学校や海外の日本人学校などに告知ポスター、お知らせを配布し、その後、朝日小学生新聞ほか開催告知広告を全国で展開いたしました。さらに、木住協では各支部や会員企業の事務所、モデルハウスなどに告知ポスターを貼り出すなど、積極的な告知活動を展開し、去る9月11日に応募を締め切らせていただきました。



日本国内688校、 海外4カ国4校が応募 6氏の審査員が厳正な審査を実施

今年も、国内外の小学校から個性的で創造性の高い作品が多数寄せられ、その作品数は高学年の部（小学4年生から6年生）で3184作品、低学年の部（小学1年生から3年生）で1608作品、合計4792作品にのぼりました。

応募校数は国内688校のほかに、特別支援学校11校（18作品）、海外からはニュージーランドをはじめ、4カ国4校からも応募（40作品）をいただきました。

審査は低学年と高学年の部に分けた厳正な予備審査を経て、10月5日に審査員による最終審査を行いました。

た。審査員はイラストレーターのはせがわゆうじ氏を審査員長に、南雲ゆりか氏・南雲国語教室主宰、原田佳道氏・国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室長、嘉藤鋭氏・住宅金融支援機構マンション・まちづくり支援部技術統括室長、今澤勇氏・朝日学生新聞社取締役営業担当兼大阪支社長、加藤永・木住協専務理事の6氏で構成。①「木のありくらし」というテーマに沿っていること、②具体的で分かりやすいこと、③発想が自由で豊かであること、④表現力がユニークであること、⑤本人の考え方が良く伝わることなどを基準に、厳正に選考しました。



5つの大臣賞など表彰

国土交通大臣賞は、高学年の部で6年生の森田祥奈さん（ニュージーランド）の「木のありくらし」が、低学年の部で3年生の五十嵐柊奈さん（石川県）の「おじいちゃんのこだわり」が、それぞれ受賞しました。

文部科学大臣賞は、高学年の部で5年生の田代葵彩さん（埼玉県）の「家と未来と私」が、低学年の部で1年生の奥村あおいさん（愛知県）の「わたしとおじいちゃんの木」が受賞しました。

農林水産大臣賞は、高学年の部で6年生の徳永珠羽さん（神奈川県）の「思い出はエネルギーになる」が、低学年の部で2年生の山口明莉さん（千葉県）の「はじめてのなえ木うえ」が受賞しました。

環境大臣賞は、高学年の部で6年生の中島碧唯さん（東京都）の「『木』が『木々』になると生まれる魔法」が、低学年の部で3年生の上條蒼馬さん（東京都）の「桜守活動～これからは桜を守りたい～」が受賞しました。

外務大臣賞は、高学年の部で6年生の柿沼泰佑さん（ニュージーランド）の「僕と将棋」が、低学年の部で2年生の中尾希さん（ニュージーランド）の「大切な木につたえたいこと」が受賞しました。

住宅金融支援機構理事長賞は、高学年の部で4年生の石田倭士さん（福島県）の「ただ今新築中」が、低学年の部で2年生の鈴木智香子さん（福島県）の「わたしと木のピアノ」が受賞しました。

日本木造住宅産業協会会長賞は、高学年の部4年生の切川翔太さん（広島県）の「ひいじいちゃんからの贈り物」が、低学年の部で2年生の井口文乃さん（千葉県）の「おじいちゃんの木まくら」が受賞しました。

朝日小学生新聞賞は、高学年の部で6年生の馬場崎心さん（佐賀県）の「木がつなぐ素敵なプロジェクト」、



木住協 市川晃会長

1年生の酒井宗佑さん「ウッドブロックのえんそうかい」が受賞しました。

審査員特別賞は、高学年の部で6年生の松井未緒さん(静岡県)の「帰り道」と、4年生の小寺伶奈さん(千葉県)の「私の元気になる場所」が、低学年の部で2年生の野崎一呂さん(鹿児島県)の「ゆめのツリーハウス」が受賞しました。



オンライン表彰式をライブ配信 受賞者はリモートで参加

オンライン表彰式には、2023年10月28日(土)午後2時より、受賞者27名の皆さんにリモート参加していただきました。また、ライブ会場には、来賓、審査員長、協会役員、さらに表彰式をつくり上げてきたスタッフが集まりました。

初めに、関係省庁および、教育委員会や学校関係者を始め、保護者の皆様のご協力のおかげで、このような形で無事実施できたことについて、感謝の言葉がMCより述べられ、オンライン表彰式がスタートしました。

その後、主催者を代表して市川晃会長が、「今年も全国各地の小学校や特別支援学校、海外の日本人学校、そして会員企業等を通じてたくさんの作品を応募いただきました。私も読ませていただきましたが、審査員の先生方も受賞作を決めるのに非常に苦労されたのではないかと思います。どの作品も純粋な視点と生き生きとした表現に溢れており、皆さんの思いが伝わりました。一生懸命原稿に向かっている姿が想像でき、とても心温まる時間を過ごすことができました。応募いただいた皆さんには心からありがとうございます申し上げます。

さて今年の夏は、これまでにない大変な暑さで、また台風や大雨も多く、皆さんもなかなか外で遊べなかったのではないかと思います。これらの異常気象と言われる現象は、地球温暖化が原因と



国土交通省 山下英和課長

なっています。その地球温暖化を引き起こしているのは、二酸化炭素を中心とする温室効果ガスです。皆さんもご存知の通り、木には様々な働きがありますが、その1つには木は成長する時に二酸化炭素を吸って炭素を固定し、私たち生き物に必要な酸素を放出するというものがあります。つまり健全な木が育つ森林を作るとは、地球温暖化を防ぐことにつながっているのです。森林には原生林や里山等色々な種類がありますが、日本の森林の多くは針葉樹の植林地で、何十年前に植えた木がたくさん育っています。しかしながら、残念な



国土交通大臣賞 高学年の部 森田祥奈さんの朗読動画



国土交通大臣賞 低学年の部 五十嵐柊奈さんの朗読動画

ことに伐採もされずに手が不十分で放置されている山がたくさんあります。つまり不健康な状態になり始めているのです。今必要なことは育った木を伐採して木材として利用し、新たに苗木を植えてやるということです。そうすることで植林地は新しく生まれ変わっていくのです。この作分コンクールを通して、たくさんの人たちが木の大切さ、素晴らしさについて綴ってくれました。これからも作分コンクールのテーマである、木のあるくらしを通して、皆さんが豊かな生活を送るとともに森の仕組みや木材の役割りに興味を持ち、未来の姿を考えていただきたいと思います。最後になりますが応募してくださったたくさんの小学生の皆さん、そしていつもこの作分コンクールを支えていただいている保護者、学校関係者、ご後援をいただいている全ての皆様に心からの感謝を申し上げます。本日はおめでとうございます。」と開会挨拶を述べました。続いて来賓を代表して国土交通省住宅局住宅生産課 山下英和課長が、「今年も多くの小学生の皆さんが身の回りにある木や木で作られたもののことについて色々と考え、それを作文にしてこの作文コンクールに参加してくれたことを大変嬉しく思います。賞を取られた皆さんの作文を読ませていただきました。いろんな木のことそして木を通じて感じたことなど、皆さんそれぞれの木のあるくらしについて書いてくれました。古い大きな木や小さな苗木、身の回りにある木で作られた色々なもの、そして木で建てられた家や建物の話など、どの作品も読んでみると木のあるくらしの風景が目に見えてきます。作文を読ませていただき、改めて木や木で作られたものは暮らしの中に深く根付いていると感じました。また、木の手触りや木の匂い、木で作られたものが持つ温かさ、木に囲まれて暮らすことの心地よさなど目で見ただけではなくて、体で感じたことを書いてくれた作品もありました。そして、今回受賞された皆さんが作文に書いてくれた、木で建てられた家や木のあるくらしの中には、皆さんのおじいさんが登場する作品が多かったことは大変印象的でした。皆さんにとって、木のあるくらしというおじいさんが思い浮かぶことが多かったのでしょうか。今回木のあるくらしという作文を書いてもらうことで、身の回りにある木や木で建てられた家や建物を通じて、そこで暮らしている自分の家族や家を作った人との繋がりや思いに気づいてくれたり、考えてくれたことは本当に良かったと思います。今回受賞された作文はどれも本当によく考えられた、大変素晴らしい作文ばかりで、これを書き上げることは本当に大変だったと思います。皆さん方が大人になった時も、小学生の時に「木のあるくらし

という作文コンクールで賞をもらったことを、時には思い出してもらって、その時には、身の周りにある木のことも考えてもらえたら嬉しく思います。本当におめでとうございます。」と祝辞を述べました。



受賞者の皆さんから
事前に送られた喜びの声を
動画で配信

この後、受賞者の表彰に移りました。昨年に引き続きオンライン開催ということで、受賞者から事前に送られた喜びの声を編集して配信することとなりました。受賞者の皆さんのうれしそうな笑顔や照れた顔、ちょっとした表情など、印象深い動画が多数寄せられました。

国土交通大臣賞は、国土交通省住宅局住宅生産課山下英和課長より、森田祥奈さんと五十嵐峰奈さんにオンラインにて表彰状が授与され、森田祥奈さんからは「素晴らしい賞をいただきありがとうございます。受け継いだ文化をこれからも大事にしていきたいと思います。」



表彰状授与の様子



受賞者インタビューの様子



リモート参加した受賞者の皆さんが一画面に集合して記念撮影

五十嵐柊奈さんからは「ありがとうございます。おじいちゃんに報告するととても喜んでくれました。これから日本の文化である木を大切にしていきたいです。」とのコメントをいただきました。

文部科学大臣賞では、田代葵彩さんより「このような素晴らしい賞をいただきありがとうございます。これからも思い出いっぱいのこの家を大切にしていこうと思います。」、奥村あおいさんより「ありがとうございます。嬉しいです。」

農林水産大臣賞では、徳永珠羽さんより「ありがとうございます。大好きな幼稚園の思い出を描いた作文でこのような賞をいただけてとても驚いています。これからも自然との思い出を増やしていきたいです。」、山口明莉さんより「このような素晴らしい賞をいただけてとても嬉しいです。これからも木を大切にいきます。ありがとうございました。」とのコメントをいただきました。

環境大臣賞では、中島碧唯さんより「このような賞をいただけて大変嬉しく思います。ありがとうございました。」、上條蒼馬さんより「このような素晴らしい賞をいただき本当にありがとうございます。僕の住んでいる東京都国立市の美しい桜並木と桜を守る桜守の人たちの活動について作文を書きました。これからも桜を大切にしていきます。」とのコメントをいただきました。

外務大臣賞では、柿沼泰佑さんより「6年生最後のチャンスに、このような素晴らしい賞をいただき本当にありがとうございます。とても嬉しいです。祖父も喜んでいきます。これからも木製の将棋盤を大切にしていきたいです。」中尾希さんからは「このような素晴らしい賞をいただけてとても嬉しいです。何回か文章を書き直したり、下書きをするのが難しかったけれど、挑戦して良かったと思います。これからも私の周りにあ

る木を観察したり色々な本を読んで勉強したいと思います。」とのコメントをいただきました。

住宅金融支援機構理事長賞では、石田俊士さんより「緊張したけど嬉しいです。」、鈴木智香子さんからは「素晴らしい賞をありがとうございます。私は大きくなっても木のある暮らしを大切にできる人になりたいです。」とのコメントをいただきました。日本木造住宅産業協会会長賞では、切川翔太さんより「ありがとうございます。このような賞を

いただきとても嬉しいです。これからもいい作文が書けるように頑張ります。」、井口文乃さんからは「大好きなおじいちゃんのことを書いた作文で賞をいただけてとても嬉しいです。仏様になったおじいちゃんにこのことを伝えたいです。ありがとうございました。」とのコメントをいただきました。

朝日小学生新聞賞では、馬場崎心さんより「このような素晴らしい賞をいただきありがとうございます。作文を書くために山の木の家作りについて調べました。そして、木材や環境についてもっと深く学びたいと思いました。」、酒井宗佑さんからは「僕の書いた作文が素晴らしい賞に選ばれて嬉しいです。ウッドブロックさん、一緒に演奏してくれてありがとう。」とのコメントをいただきました。

審査員特別賞では、松井末緒さんより「このような素晴らしい賞をいただき本当に嬉しいです。私は帰りの道の木について書きました。これからも帰りの道の木を見て楽しく帰りたいと思います。」、小寺伶奈さんからは「ありがとうございます。一生懸命書いた作文で賞をいただけてとても嬉しいです。書くことが好きなのでこれからも頑張ろうと思います。ありがとうございました。」、野崎一呂さんからは「ありがとうございます。賞をもらえて嬉しいです。早く夢のツリーハウスを作って過ごしたいです。」とのコメントをいただきました。



インタビューコーナーの様子



木住協 全国10ブロック賞表彰 最優秀団体賞も決定

引き続き、日本木造住宅産業協会ブロック賞の授与に移りました。表彰は、全国10ブロックに分かれて、審査を担当した支部長名で行われました。各賞には、ブロック名と受賞者のお住まいの県の県木を冠したタイトルが付けられました。

北海道ブロック エゾマツ賞は、高学年の部で6年の武田ありすさん(北海道)の「私と家とジュンベリー」が、低学年の部で3年の児玉悠心さん(北海道)の「木を守るために」が受賞しました。

東北ブロック ケヤキ賞は、高学年の部で5年の鈴木初香さん(福島県)の「私の大好きな森」が、低学年の部で3年の小野寺大和さん(宮城県)の「まきボイラーってなに」が受賞しました。

関東ブロック マキ賞・イチョウ賞は、高学年の部で5年の牟田明哩さん(千葉県)の「音楽は木からの贈り物」が、低学年の部で3年の宇野美咲さん(神奈川県)の「大磯小学校と共に生きてきた木」が受賞しました。

北信越ブロック ユキツバキ賞・マツ賞は、高学年の部で4年の田辺康士郎さん(新潟県)の「木の大切さ」が、低学年の部で2年の平井涼葉さん(福井県)の「まきストーーーーブ!!」が受賞しました。

甲・静岡ブロック モクセイ賞は、高学年の部で6年の佐藤綾音さん(静岡県)の「木と共存すること」が、低学年の部で2年の川瀬浩太郎さん(静岡県)の「すごく長生きしている梁」が受賞しました。

中部ブロック ハナノキ賞は、高学年の部で4年の広沢彩華さん(愛知県)の「自然にやさしい木」が、低学年の部で3年の神谷昌克さん(愛知県)の「ぼくたちの周りの木」が受賞しました。

近畿ブロック クスノキ賞・北山杉賞は、高学年の部で4年の小中香凛さん(兵庫県)の「私の友達しろちゃん、ふしぎな木」が、低学年の部で3年の山川輝良里さん(京都府)の「私の大好きな木」が受賞しました。

中国ブロック アカマツ賞・モミジ賞は、高学年の部で5年の笠井菜摘さん(岡山県)の「わたしのシンボルツリー」が、低学年の部



木住協 加藤永専務理事

で2年の切川琉誠さん(広島県)の「みんなのおうち」が受賞しました。

四国ブロック マツ賞は、高学年の部で4年の矢野桜さん(愛媛県)の「私の成長を見守ってくれる桜の木」が、低学年の部で2年の中川すみれさん(愛媛県)の「さるすべりの木のようにせいさん」が受賞しました。

九州・沖縄ブロック つつじ賞・クスノキ賞は、高学年の部で6年の濱野陽咲さん(福岡県)の「私の気持ちとパキラの木」が、低学年の部で3年の小川優月さん(熊本県)の「木があるということ」が受賞しました。

受賞した皆さんからは動画コメントが寄せられました。また、佳作として、高学年の部16作品、低学年の部16作品、計32作品が選出されました。さらに、特別賞として、特別支援学校の高学年の部14作品、低学年の部2作品、計16作品が選出されました。

続いて、団体賞の表彰に移り、作文コンクールへの取り組みが評価された、富田林市立喜志小学校(大阪府)が最優秀団体賞に輝きました。また、日南市立大窪小学校(宮崎県)、安城市立安城北部小学校(愛知県)、江別市立対雁小学校(北海道)、在バン格拉デシュ日本国大使館付属ダッカ日本人学校の4校が優秀団体賞を受賞しました。



好評の受賞者 インタビューコーナー

今回も盛り上がりを見せてくれました。

今年で4回目を数えるオンライン表彰式。恒例となったインタビューコーナーでは、受賞者の皆さんにZoom越しにお話を伺いました。

司会者からの呼びかけに、元気よく手を挙げて答えてくださった皆さん。「作文の題名をどうやって決めましたか?」という質問に、山川輝良里さん(『私の大好きな木』)は「木が大好きで木を大切にしていたからです。木は美しい存在です。」、上條蒼馬さん(『桜守活動～これからも桜を守りたい～』)は「学校で桜守活動という桜を守る活動を教えにに来てくれた人がいて、その活動が木のためになっていると知ってもっと桜のための活動をしていきたいからです。」と答えてくださいました。また、「今回受賞して周りでは一番喜んでくれた人は誰ですか?」という質問に、鈴木初香さんは「一番お父さんが喜んでいました。よかったねやおめでとうとすごく言ってくれました」、奥村あおいさんは「おばあちゃんとおじいちゃんです。おめでとうと言ってくれました。」、川瀬浩太郎さんは「96

歳のおばあちゃんです。びっくりしていました。」と答えてくださいました。

続いて、来賓の山下英和氏より「木の好きなところを教えてください。」と質問がありました。野崎一呂さんは「自然を感じるところです。」と答えてくださいました。

インタビューコーナーが終了した後、受賞者を代表して国土交通大臣賞の森田祥奈さん、五十嵐柊奈さんのお二人による朗読が配信されました。お二人の気持ちが伝わる素晴らしい朗読に加え、事前にご家族から提供していただいたイメージ写真等を編集した動画をあわせた発表となりました。希望された受賞者に後日お送りするDVDでは5大臣賞の高学年と低学年計10名による朗読の様子も収録しました。



はせがわ審査員長による講評 今しか書けないことへの 挑戦に期待



審査員長のはせがわゆうじ氏

表彰式ではこの後に審査講評が行われ、審査員長のはせがわ氏から「受賞者の皆さんおめでとうございます。ご本人の朗読とご家族提供の写真が背景にある朗読、こんな説得力のある素晴らしい朗読を聞いて感激してしまいました。本当におじ

いちゃんとのこんな素敵な隠れ家があったんだと思いました。

毎年、本コンクールには力作がたくさん集まります。審査員一同、やはり大変悩ましいところなのですが、どの作品に賞をあげてもおかしくない力作がいっぱい集まりますので。それでも最後に受賞が決まった作品の決め手は、やはり何かこの人にしかない、何かキラリと光るものがあったのかなという風に思います。

そして、この機会にちょっと思ったことなんですけど、皆さんちょっと優等生すぎる気がしています。優等生であることは悪いことではないのですが、もっと自由ではっちゃけてもらってもいいのかなと思います。皆さんにしか書けない、皆さんの今の年頃じゃないと書けないものがあると思います。大人が書くような文章を今の皆さんが書いて、「すごいね」と褒められるということよりも、もう大人になったら書けないものを書く素質を皆さんは持っていると思います。もっと自由になんかはっちゃけ

てもらっていいんじゃないかなと思っていました。是非受賞された皆さんは、みんなそういう力を持ってもらっやと思うので、これからも創作活動を続けてください。次に原稿用紙を広げた時に、もう誰も書いたことない作品を1回書いてやろうと思って、一度始めてみてください。楽しみにしています。」との講評がありました。この後、主催者を代表して日本木造住宅産業協会専務理事の加藤永より閉会の挨拶として「小学生の皆様、たくさんの応募をいただきました。ありがとうございました。そして受賞大変おめでとうございます。ご指導いただいた先生方とご家族の皆様をはじめご協力いただきました皆様、またご後援をいただきました関係省庁の皆様、大変ありがとうございました。皆様のおかげで、今年もたくさんの素晴らしい作品に出会うことができました。」と感謝の言葉を述べ、表彰式を締めくくりました。

今回もオンライン表彰式のため、スクリーンショットでの記念撮影会となりました。リモート参加していた皆さんはパソコンやスマートフォンのカメラに顔を近づけて、笑顔で揃って撮影しました。なお、作文コンクールに応募していただいた皆さんには記念品の贈呈のほか、木住協のホームページに受賞者名を掲載するとともに、今回のオンライン表彰式の様子をご覧いただけます。木住協では今後も「木のある暮らし」をテーマに、地球環境にやさしくサステナブルな素材である「木」の良さを訴え、日本の住文化の原点といえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくことなどを目的に、この作文コンクールを継続していきたいと考えています。



運営本部の様子



配信エンディングの様子

受賞者と作品名

大臣賞等・ブロック賞

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
低学年の部 (小学1年生から3年生)	国土交通大臣賞	おじいちゃんのこだわり	五十嵐 柊奈	石川県
	文部科学大臣賞	わたしとおじいちゃんの木	奥村 あおい	愛知県
	農林水産大臣賞	はじめてのなえ木うえ	山口 明莉	千葉県
	環境大臣賞	桜守活動～これからも桜を守りたい～	上條 蒼馬	東京都
	外務大臣賞	大切な木につたえたいこと	中尾 希	ニュージーランド
	住宅金融支援機構理事長賞	「わたしと木のピアノ」	鈴木 智香子	福島県
	日本木造住宅産業協会会長賞	おじいちゃんの木まくら	井口 文乃	千葉県
	朝日小学生新聞賞	ウッドブロックのえんそうかい	酒井 宗佑	熊本県
	審査員特別賞	ゆめのツリーハウス	野崎 一呂	鹿児島県
	北海道ブロック エゾマツ賞	木を守るために	児玉 悠心	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	まきボーイラーってなに	小野寺 大和	宮城県
	関東ブロック イチョウ賞	「大磯小学校と共に生きてきた木」	宇野 美咲	神奈川県
	北信越ブロック マツ賞	まきストーーーーープ!!	平井 涼葉	福井県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	「すぐく長生きている梁」	川瀬 浩太郎	静岡県
	中部ブロック ハナノキ賞	ばくたちの周りの木	神谷 昌克	愛知県
	近畿ブロック 北山杉賞	私の大好きな木	山川 輝良里	京都府
	中国ブロック モミジ賞	みんなのおうち	切川 琉誠	広島県
	四国ブロック マツ賞	さるすべりの木のようせいさん	中川 すみれ	愛媛県
	九州・沖縄ブロック クスノキ賞	木があるということ	小川 優月	熊本県

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
高学年の部 (小学4年生から6年生)	国土交通大臣賞	「木のあるくらし」	森田 祥奈	ニュージーランド
	文部科学大臣賞	家と未来と私	田代 葵彩	埼玉県
	農林水産大臣賞	思い出はエネルギーになる	徳永 珠羽	神奈川県
	環境大臣賞	「木」が「木々」になると生まれる魔法	中島 碧唯	東京都
	外務大臣賞	僕と将棋	柿沼 泰佑	ニュージーランド
	住宅金融支援機構理事長賞	ただ今新築中	石田 倭士	福島県
	日本木造住宅産業協会会長賞	ひいじいちゃんからの贈り物	切川 翔太	広島県
	朝日小学生新聞賞	木がつなぐ素敵なプロジェクト	馬場崎 心	佐賀県
	審査員特別賞	帰り道	松井 未緒	静岡県
	審査員特別賞	私の元気になる場所	小寺 伶奈	千葉県
	北海道ブロック エゾマツ賞	私と家とジュンペリール	武田 ありす	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	私の大好きな森	鈴木 初香	福島県
	関東ブロック マキ賞	音楽は木からの贈り物	牟田 明哩	千葉県
	北信越ブロック ユキツバキ賞	木の大切さ	田辺 康士郎	新潟県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	木と共存するということ	佐藤 綾音	静岡県
	中部ブロック ハナノキ賞	自然にやさしい木	広沢 彩華	愛知県
	近畿ブロック クスノキ賞	「私の友達しろちゃんは、ふしぎな木」	小中 香凛	兵庫県
	中国ブロック アカマツ賞	わたしのシンボルツリー	笠井 菜摘	岡山県
	四国ブロック マツ賞	私の成長を見守ってくれる桜の木	矢野 桜	愛媛県
	九州・沖縄ブロック つつじ賞	「私の気持ちとパキラの木」	濱野 陽咲	福岡県

佳作

低学年の部	高学年の部
五十嵐 亘 石川 稜惶 大橋 未来 奥沢 照行 門脇 みのり 小嶋 里奈 後藤 奏太 坂下 青渚 富井 小晴 西田 憲右 日高 真琴 前花 滯音 水野 千鶴 南川 咲嬉 宮本 夏帆 山本 明香吏	茨城県 ニュージーランド 東京都 茨城県 山形県 広島県 神奈川県 鹿児島県 埼玉県 ニュージーランド 鹿児島県 沖縄県 東京都 奈良県 和歌山県 鹿児島県 石川 璃乙 岩崎 琉士 薄井 唯 加治佐 滉 鎌上 果 上村 昇矢 岸本 樹 黒木 菜央 須藤 大翔 田上 環子 林 京志郎 比良 優月 古井 珠野 山口 寧々 山田 恭平 吉江 琴南 ニュージーランド 鹿児島県 福島県 鹿児島県 北海道 鹿児島県 広島県 千葉県 宮城県 熊本県 兵庫県 鹿児島県 茨城県 岡山県 高知県 栃木県

特別賞

低学年の部	高学年の部
鬼頭 伸弥 永田 桜子	東京都 大阪府
佐藤 有悟 白取 璃碧 鈴木 健二郎 鈴木 星南 鈴木 萌愛 中村 凜来 原田 鈴平 藤田 里央 吉澤 朋佳	大分県 青森県 静岡県 静岡県 東京都 千葉県 鹿児島県 青森県 大分県
高学年の部	
今井 悠人 岡田 悠笑 岡村 笑子 片本 結葉 小林 瑛樹	青森県 愛知県 高知県 東京都 長野県

団体の部

最優秀団体賞	富田林市立喜志小学校 日南市立大窪小学校 安城市立安城北部小学校 江別市立対雁小学校 在バングラデシュ日本国大使館付属ダッカ日本人学校
優秀団体賞	

審査員の講評



イラストレーター
はせがわゆうじ氏

毎年、思うことですが、自分が小学生の頃はこんな作文、とても書けなかったなあ…と。笑

今回も全国からそんな力作がたくさん集まりました。

全員、木の名前が入った三姉妹、素敵なお家族を想像してしまふ「おじいちゃんのこだわり」。

薪の中に冬眠するヤモリや虫をはらって逃がしてあげる「わたしとおじいちゃんの木」優しさが伝って来ますね。

実は桜は弱ってきている事を知った「桜守活動～これからも桜をまもりたい～」にはとても大切なことが丁寧に説明されています。

「ウッドブロックのえんそうかい」は音の聴こえ方の表現がとても新鮮でした。

夜おそくまで本を読んでいていいルールを作る「ゆめのツリーハウス」は私もわくわくしてしまいました。

空き家問題に触れ、住む人がいなくなるとたちまち彩を失い、そこだけ時間の止まった空間のようにポツカリ取り残されてしまう…という表現がすばらしい「家と未来と私」。

木には第三の人生があるという「思い出はエネルギーになる」、本当にそのとおりだと思います。

想像から絵を描くことが好きだ、という「木がつなぐ素敵なプロジェクト」はとても豊かな想像力で、映像がリアルに浮かびました。

その他、どの作品にもキラリと光るものがありました。

どれが受賞してもおかしくないような状況の時に、決め手はやはり読んだ人の心を動かすかどうかだと思います。

ほんの一行、ほんの一言で人の気持ちは動いてしまう気がします。

それは意図的に作られるものというより、書いた作者のひととしての何か…優しさとか純粋さとか、隠しきれない何かが出てしまった時かな、となんとなく思います。

ほんとにみなさんの作品には、いつも刺激をいただきありがとうございます！とこちらから言いたいです。

ぜひ今後の作品も期待しています。



南雲国語教室主宰
南雲 ゆりか氏

見慣れたものやちょっとした経験を自分ならではの感性を働かせて深く掘り下げる……簡単なことではありませんが、見事にそれを成し遂げた作品が並びました。審査は大接戦で、審査員がそれぞれの「推し作品」について熱く語る展開となりました。

「わたしとおじいちゃんの木」はレトリックが光っていました。まず、薪ストーブは「りょうりじょうず」だけれど「まきをたくさんたべる」というユーモラスな擬人法。薪が冬眠中の生き物の「おふとんになっている」「花さかじいさんのように」畑に灰をまく、などの比喩もユニークです。文体もきびきびとしていて小気味よく、はつらつとした印象の作品でした。

『木』が『木々』になると生まれる魔法は早朝のランニングコースから発想した作品。「これでもかというほどに植物の多い地域」を走るとリフレッシュできるのは、なぜだろうと思考を深めていきます。そして、「天敵とですら生態系を築く中で協力しあっている」植物の生き方に、「人間も学べるのではないかと」述べます。木から森、生態系、人間の生き方へと視点を広げているところに、大人びた知性を感じました。

高い文章力を発揮していたのが「ひいじいちゃんからの贈り物」。60字～80字くらいの長い一文を連ねていますが、語順がよく整理されており、すんなりと伝わってきます。また、「(祖父は)ひたいにうつすらと輝く汗を、クタクタになったタオルでぬぐいながら教えてくれた」「はくの何倍もゴツイ手を広げて見せてくれた」など描写が丁寧です。様子がありありとイメージできるだけでなく、祖父の実直な人柄までもが目に見えるようでした。

他にもウッドブロックを演奏した喜び、人から人へと受け継がれる重厚な将棋台、木の家への愛着、自然を守る活動など、心に迫る作品がたくさんありました。折にふれて読み返してみなさんの思いを心に留めておきたいと思います。ありがとうございました。





国土交通省 住宅局
住宅生産課 木造住宅振興室長
原田 佳道氏

自然の木、住まいや建築物、机や道具といったように題材となっている「木」は多種多様で、また、その木への思いも作品によって様々で、改めて、こんなにも木は身近なものなのだなと気づかされながら、読ませていただきました。



低学年の部の国土交通大臣賞は「おじいちゃんのこだわり」です。「木は日本の文化じゃあ」から始まる、おじいさんの木へのこだわりがあふれ出ている作品です。おじいさん設計の木の家の細かなデザインや、木でいっぱい庭とそこにある木でできた「秘密基地」(茶室でしょうか?)から見える四季の風景など、おじいさんの木へのこだわりが詰まった住まいであることがとてもよく表現されていますし、そのこだわりをちゃんとわかっているんだな、と感心させられます。さらに、三姉妹の名前に木の名前が入っていて、その名前と同じ庭の木を「わたしたちの木」と呼んでいたりなど、おじいさんの木へのこだわりが家族みんなにも温かく受け継がれていっている、そう感じさせる素晴らしい作品です。

高学年の部の国土交通大臣賞は「木のある暮らし」です。日本の建築物での木の使われ方を通し、木造の建築物の良さや木を使うことの大切さをしっかりと伝えている作品です。作品に出てくる建築物は、縄文時代の住居、現存する世界最古の木造建築物である法隆寺、おじいさんが利用している木造の講堂であり、まさに、遠い昔のものから身近なものまで、日本の建築物に木が使われてきたことがよくわかる構成になっています。また、法隆寺など昔の建築物での木の使われ方がよく描かれているのに加えて、その木を使った昔の人々の考え方にも想いを巡らせており、最後には、木を使うことが「日本の文化」であり、「受けついだ文化を守っていかなければならない」と強い決意も示されています。木を使う「文化」の大切さをストレートに語りかける力作です。

二つの作品は、それぞれテイストは異なりますが、どちらも木を使うという日本の「文化」の良さ、大切さを感じさせてくれる作品です。そのほかの作品も、身近にある木への想いをそれぞれの文章で表現した素晴らしい作品ばかりです。今回、作文を書かれたみなさんが、今後も木を身近に感じながら健やかに成長していただければと期待しています。



独立行政法人 住宅金融支援機構
マンション・まちづくり支援部 技術統括室長
嘉藤 鋭氏

今年も木のあるくらしを作文にして、数多くの作品が届きました。皆さまの作品を読んでいると、木のあるくらしの中で体験したこと、感じたことに大変感動していることが伝わってきて、その情景が鮮やかに頭に浮かび、木のあるくらしがとても暖かいものであると実感しました。応募いただいた作品は、いずれも力作で素晴らしい作品ばかりでした。



低学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「わたしと木のピアノ」は、いえは木でできていて匂いがとても良いこと、木のおままごとのセットで遊んだこと、木でつくられたおはしやスプーンで食事をするなど、木のあるくらしの暖かさを見事に描いています。木で作られているピアノはとてもやさしく丸い音を奏でます。おうちの木の仲間たちが笑顔で見守ってくれるピアノの音を聞きたくなる素晴らしい作品です。

高学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「ただ今新築中」は、新しい家を建てることへのワクワク感、大工さんに家の中を見せてもらったうれしさや感謝の気持ちが見事に描かれています。また、祖父から木の家の良さを教えてもらったりして、家の工事が進む中で多くのことを学んでいることが分かります。これから良い匂いのする木の家で、楽しく、暖かく暮らしていくことを予感させる素晴らしい作品です。

作文は、作文用紙を通じて作者の思いが読者に伝わります。作文用紙に書かれた文字一つ一つが作者の思いを届け、大きな感動を与えてくれます。素晴らしい作文を、これからもずっと書き続けてください。そして、素敵な感動が広く届けられていくことを期待しています。



朝日学生新聞社 取締役営業担当
兼 大阪支社長
今澤 勇氏

感じたこと、聞いたこと、調べたこと、さまざまな体験を通じて多くのことを学びながら、それらを作品の中に、みなさんともいっきと表現していました。どの作品も木のある暮らしの中の日常を、みずからの視点で丁寧に切り取った魅力ある作品ばかりでした。



低学年の部の朝日学生新聞社賞「ウッドブロックのえんそうかい」は、初めての木の楽器に触れてから、演奏会本番にいたる練習の風景が生き生きと描かれています。ウッドブロックという木の楽器の「つつつ・ざらざら」な手触り感、たたく力による「高い・低い」聞こえ方の微妙な違いなど、徐々に楽器となじんでいく感覚がとても丁寧に伝わってきました。演奏会の練習シーンではそれぞれの楽器の音が実際にあちらから・こちらから、リズムを合わせて聞こえてくるような臨場感がありました。

高学年の部の朝日学生新聞社賞「木がつなぐ素敵なプロジェクト」は、祖母のお葬式の後、親族でしていた家まつわる会話のやりとりが印象的です。その「家」を建てる「木の成長」について図書館で調べていくうちに、環境においても木がとても大切な存在であるということ学びます。長い年月をかけて育てた木が、多くの人の力を結集して家になる。なにげない親族どうしの会話から、この木と家の関係は壮大で素敵なプロジェクトだと気づきます。想像力を働かせて当時の風景を思い描くなど、とても表現豊かな作品でした。

今回の朝日学生新聞社賞の2作品は、同じ木でも「楽器」と「家」とテーマこそ違いますが、それぞれ違う角度から「木に感謝する気持ち、木（楽器や家）とともに過ごす時間の大切さ」がとても良く伝わるすばらしい作品でした。

受賞されたみなさん、おめでとうございます。応募されたすべてのみなさんに感謝申し上げます。



一般社団法人日本木造住宅産業協会
専務理事
加藤 永氏

今年もたくさんの応募をいただき、ありがとうございました。私は今年から審査に加わりましたが、応募いただいた皆さんの感性の豊かさと完成度の高い表現力に驚かされました。また、自由な発想や素直な思いとともに、気になる問題を自ら調べる熱心さにも感心しました。



木造の住宅や建物はもちろん、様々な木製の家具や楽器、あるいは思い出の樹木や植樹体験を通じた環境問題や防災・社会問題への関心など、実に多様な「木のある暮らし」に出会えました。

そんな中で、日本木造住宅産業協会会長賞は、いずれも、家族の中で世代を超えて引き継がれていく思いを表現した作品となりました。低学年の部の「おじいちゃんの木まくら」は、木の家と家具、そして愛用していた木のまくらを通じて、亡くなったおじいちゃんとの思い出が生き生きと語られています。

高学年の部の「ひいじいちゃんからの贈り物」は、建具屋だった曾祖父から引き継がれた木の家と大工道具や物づくりの技術、そして「教えてもらうのを待つのではなく自ら学ぶ」という教訓を大事にしていこうという気持ちが、とても素直に表現されています。

各大臣賞をはじめとする受賞作にも、祖父母や家族、友人などとの思い出や体験に基づく作品が見られます。木というものが、技術や文化とともに、人と人のつながりにも関わっていることに気づかされました。

この他にも、印象に残るたくさんの作品がありました。皆さんの素晴らしい作品に接することができ、大変幸せでした。来年もたくさんの素敵な作品の応募をお待ちしています。



「令和4年度自主統計および 着工統計の分析報告書」まとまる

業務・広報委員会(村岡照生委員長)はこのほど、「令和4年度木住協自主統計および着工統計の分析」結果をまとめ、報告書として発行した。1種A、B、C会員を対象に、令和4年度(令和4年4月～令和5年3月)に建設した木造軸組住宅の着工戸数をアンケート形式で集計したもので、今回で34回目の調査となった。調査結果によると、平成28年省エネルギー基準適合住宅(平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む)が木住協戸建て住宅の78.1%、また長期優良住宅は38.6%を占め、依然として高い水準で推移しており、住宅の質向上に貢献していることが分かった。

調査は令和5年5月1日 戸建て住宅(長屋を含む) 着工戸数推移

現在の469社の1種会員を対象に実施し、このうち1種A会員103社、同B会員237社、同C会員66社の合計406社から回答を得た。回収率は86.6%となり、前年度より2.5ポイント増えた。その結果、1

種会員が建設した木造軸組住宅は戸建て住宅が85,647戸(前年度比1.9%減)、共同住宅が4,233戸(前年度比27.9%減)となり、合計では89,880戸(前年度比3.5%減)となった。

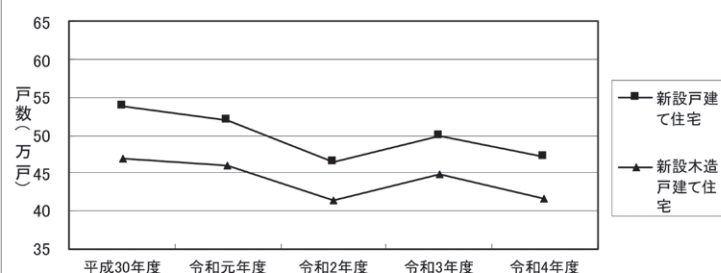
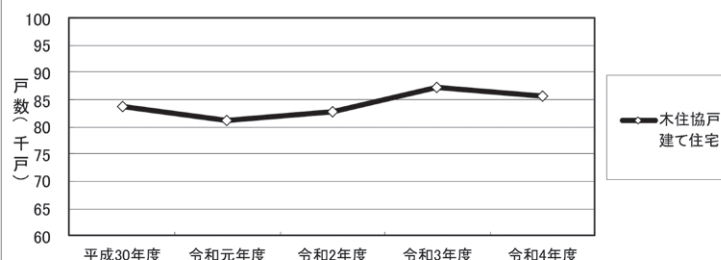
国交省がまとめている新設木造戸建て住宅着工数に占める1種会員のシェアは20.5%(前年度比1.0ポイント増)となり、ほぼ5棟のうち1棟は木住協会員の住宅と言える。同様に地域別シェアをみると中部が25.5%と最も高く、関東24.4%、四国18.1%、九州17.6%、北陸の16.4%などの順となった。

戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅は66,848戸で、戸建て住宅の78.1%を占めた。因みに木住協の戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅の割合は、平成29年度の74.2%以降、平成30年度80.5%、令和元年度82.6%、同2年度81.2%、同3年度75.4%と高い水準で推移している。省エネ性能の向上から、1種会員が平成28年省エネルギー基準適合住宅に切り替えを進めていることが窺える。木住協戸建て住宅に占める地域別シェアは、北陸86.4%、九州84.8%、東北83.9%、沖縄83.4%、北海道81.3%、中国80.5%の順となり、6地域で80%を上回った。

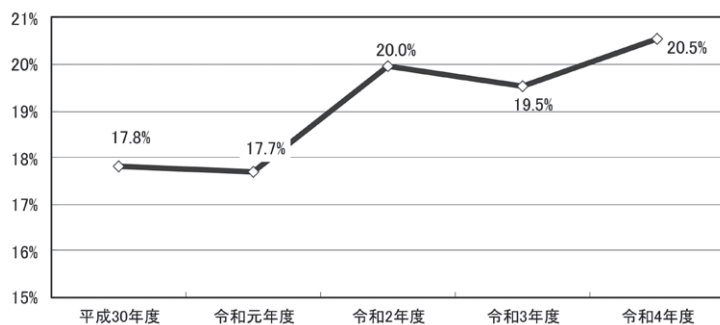
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
木住協戸建て住宅	83,624	81,216	82,647	87,304	85,647
うち木住協3階建て戸建て住宅	5,699	7,256	8,650	8,376	8,862
うち平成28年省エネルギー基準適合住宅 (平成25年省エネルギー基準適合住宅含む)	67,349	67,109	67,127	65,819	66,848
うち品確法に基づく設計評価住宅	20,941	19,710	21,785	26,267	26,034
うち品確法に基づく建設評価住宅	16,485	14,991	14,748	17,643	16,814
新設戸建て住宅	537,523	518,890	463,350	499,985	470,770
品確法に基づく設計評価住宅	126,930	129,208	115,415	131,962	141,034
品確法に基づく建設評価住宅	88,970	105,910	98,475	96,065	98,960
新設木造戸建て住宅	469,467	459,425	414,072	447,428	416,893
うち新設木造3階建て以上戸建て住宅	27,956	29,342	24,357	26,177	

品確法に基づく設計評価住宅は26,034戸、建設評価住宅は16,814戸で、着工統計の全国戸建て設計評価、建設評価住宅に対する木住協シェアは設計評価住宅が18.5%、建設評価住宅が17.0%となった。また、木住協戸建て住宅に占める木住協設計評価住宅は30.0%、同建設評価住宅は19.6%となり、全国戸建ての同割合よりそれぞれアップとなった。

長期優良住宅の建設戸数(戸建て)は33,080戸となり、



木造戸建て住宅における木住協シェアの推移



木住協戸建て住宅の38.67%を占め、前年度調査より0.1ポイントの減となった。また全国戸建て住宅に占める長期優良住宅シェアが27.7%に対し、木住協会員は変わらず質の向上に大きく貢献しているといえる。地域別にみて長期優良住宅のシェアが高かったのは近畿52.6%で、九州50.7%、中部48.8%、四国44.4%、東北42.7%と続いている。逆に低かったのは北海道18.9%、関東27.7%だった。

太陽光発電搭載住宅の建設戸数は26,920戸で、戸建て住宅建設戸数の31.4%を占め、前年度調査より4.7ポイント上昇した。ZEH(ニアリー ZEHを含む)の建設戸数は20,854戸となり、戸建て住宅建設戸数の24.3%を占め、前年度調査より6.1ポイント上昇し、前年度も一昨年より5ポイント上昇しており、近年大きく伸びていることが分かる。ZEH適合住宅の地域別割合は、近畿34.2%が最も高く、九州32.5%、中国31.9%、四国の26.9%の順となった。

3階建て以上戸建て住宅では、8,862戸となり、昨年調査時より486戸の増加となり、木住協内シェアは10.3%で、前年度比0.7ポイントの増となった。国交省は3階建て以上戸建

て住宅の調査は令和4年度よりは行わないとのこととで着工木住協との比較はできなかった。

木造共同住宅の建設戸数は4,233戸となり、前年度より27.9%の減となった。新設木造共同住宅に占める木住協シェアは7.5%で、前年度より3.1ポイントの減となった。建設戸数のうち平成28年省エネルギー基準適合住宅は2,877戸で共同住宅の68.0%のシェアとなり、前年度と比べて24.0ポイントの減となっている。また、共同住宅1戸あたり平均床面積は37.8㎡で、前年度より1.7㎡増加した。新設住宅着工の平均床面積は35.4㎡で、木住協共同住宅が2.4㎡広い結果になった。地域別では東北が46.5㎡で最も広く、次いで関東41.7㎡、四国41.1㎡となった。

記者報告を8月30日、報道関係13社14名出席の下行った。発表は、自主統計の他に、「耐火」「石綿関係」「木造ハウジングコーディネーター」「作文コンクール」を行った。また4年ぶりに記者との懇親会を行い、木住協より加藤専務はじめ、佐々木参与・事務局長、各事業部長、また業務・広報委員会より2名の出席で、懇親を図った。

認定長期優良住宅(戸建て) 着工戸数

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
住宅着工統計 新設住宅(戸建)	戸数(A)	469,467	459,425	414,072	447,428	416,893
長期優良住宅建築等計画の認定(戸建て)	戸数(B)	108,800	107,389	100,503	118,289	115,509
住宅着工統計新設住宅(戸建)に占める認定長期優良住宅シェア(B/A)		23.2%	23.4%	24.3%	26.4%	27.7%
木住協戸建て住宅	戸数(C)	83,624	81,216	82,647	87,304	85,647
木住協長期優良住宅	戸数(D)	30,241	30,938	28,318	33,776	33,080
長期優良住宅建築等計画の認定に占める木住協シェア(D/B)		27.8%	28.8%	28.2%	28.6%	28.6%
木住協戸建て住宅に占める認定長期優良住宅の割合(D/C)		36.2%	38.1%	34.3%	38.7%	38.6%

木住協戸建て住宅における平成28年省エネルギー基準適合住宅(平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む)の推移

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
木住協戸建て住宅戸数	戸数	83,624	81,216	82,647	87,304	85,647
	平成30年度比	100.0	97.1	98.8	104.4	102.4
平成28年省エネルギー基準適合住宅戸数	戸数	67,349	67,109	67,127	65,819	66,848
木住協戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅シェア		80.5%	82.6%	81.2%	75.4%	78.1%

太陽光発電搭載住宅(戸建て) 着工戸数

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
木住協 太陽光発電搭載住宅	戸数(A)	23,796	23,946	20,447	23,272	26,920
木住協 戸建て住宅戸数	戸数(B)	83,624	81,216	82,647	87,304	85,647
木住協戸建て住宅に占める太陽光発電搭載住宅シェア(A/B)		28.5%	29.5%	24.7%	26.7%	31.4%

ZEH 適合住宅(戸建て) 着工戸数(ニアリー ZEH 適合住宅を含む)

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
木住協 ZEH適合住宅	戸数(A)	9,648	9,251	10,877	15,883	20,854
木住協 戸建て住宅戸数	戸数(B)	83,624	81,216	82,647	87,304	85,647
木住協戸建て住宅に占めるZEH適合住宅シェア(A/B)		11.5%	11.4%	13.2%	18.2%	24.3%

「木造ハウジングコーディネーター 資格試験講習会」を実施

木住協では、2023年度木造ハウジングコーディネーター資格制度の講習会を9月に実施した。この資格制度は、理想の住まいをコーディネートできる住宅営業職・技術職の人材育成を目的とするもので、2001年度より継続して実施し今年で23回目。資格取得者は延べ6,756人となる。試験に先立つ講習会は、対面講習会(大阪・愛知・東京)とWEB講習会を併せて開催。木造住宅営業の基本から、設計・施工にわたる知識を広く学ぶものである。資格試験は12月に全国テストセンターにおいて、デジタル試験が実施される。

東京会場の都立産業貿易センターでは、約70名が営業と技術を2日間にわたり学んだ。この講習会はWEB配信され、自宅や職場でも受講できる。また、「想定問題集」のデジタル化によって、学習がしやすくなり学力向上が期待できる。会場では、これからの木造ハウジングの発展を担う若い方々の参加が目立ち、皆さんの学習意欲が感じられた。講習はテキストの他に、グラフや図表を大型画面に映して

講師が説明。営業科目の講習では、講師が自分の営業経験からトーク例を挙げながら、引き込まれるようなテンポの良い講義で説明が進んだ。「試験に出がちな項目」と講師が強調する内容説明では、皆さん真剣にメモをとり、マーカーでチェックする姿が見受けられた。



木造ハウジングコーディネーター講習会・資格試験

**対面講習会のWEB配信と
「想定問題集」のデジタル化**



PC・スマホ・タブレット
があれば、どこでもOK



決められた期間の
好きな時間に受けられるので
時間に無駄がありません



「想定問題集」のデジタル化により
学習のしやすさで学力アップ




自宅や職場で受講できるので
移動不要で出費削減



分かりやすいカリキュラムで
シンプルで学びやすい

学び方 の 提案

**資格試験会場は
全国テストセンター**



全国に多数の会場を用意
主要都市には複数の会場



お好きな試験会場で受験
試験は紙からデジタルへ



試験室はソーシャルディスタンス
安心して受験できます

生産技術委員会 視察レポート

(一社)日本木造住宅産業協会 生産技術委員会では、本年度第60回全国建設業労働災害防止大会（広島大会）の視察研修会を、10月5日、6日に実施しました。

また、初日に開催された記念講演の前に、広島市環境局中工場を視察見学しました。

広島市環境局中工場

広島市環境局中工場は、広島市中区にある清掃工場であり、かつて同地にあった清掃工場の老朽化に伴い2004年に建替えられた。ネガティブなイメージに捉えやすいゴミ処理場を、美術館のような見せる造りにしてポジティブな方向へ活かした作品となり、設計はモダニズム建築の作り手で、数々の受賞歴のある谷口吉生氏が手掛けた。

この建物の特徴として、“平和の軸線” 平和公園内の原爆ドーム・原爆死没者慰霊碑・広島平和記念資料館が作る広島市の南北の都市軸をそのまま施設に取り込んでいることが挙げられる。平和公園から続きゴミ運搬車の搬入路となる吉島通りの突き当りに建物があり、その同軸上に建物を貫くように1階がゴミ運搬車路・2階以上が「エコリウム」と呼ばれる吹き抜けの工場見学スペースとなっており、そこから更に抜けると瀬戸内海を展望できるデッキがある。



工場見学参加者

エコリウム空間はガラス張りで空気は脱臭処理され清潔感を演出し、ゴミ処理の各プラントを美術館の展示のように見せている。その様子は、SF映画に出てくる宇宙基地のような雰囲気だと、参加者全員が口をそろえて評していた。



エコリウム
出展元：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



瀬戸内海を望む展望デッキ
出展元：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

デザイン性に優れた新築注文住宅で 地元一位の工務店をめざす

株式会社 いちい(島根県)

Interview

島根県松江市内山陰本線玉造温泉駅から500メートルほどの市街地に株式会社いちい松江本社がある。2014年にいちい建築株式会社として設立し、2017年に株式会社いちいへ社名を変更するとともに、この松江市玉湯町へ社屋を移転した。2019年には出雲支店も開設し、地元・島根に根ざした家造りのための専門家集団として、お客様それぞれの要望に応える提案を通して、各方面からのご依頼を多数いただいていた。事業内容としては、注文住宅の設計・施工を主体として、商業施設の店舗改装、住宅のリノベーションなども行なっている。

個人経営として独立してから約16年、会社設立から約10年、優秀な大工職人の育成を図るとともに、地元密着の信頼される工務店をめざす渡部智司社長に、創業の思いや事業内容、今後の目標、木造住宅への思いなどを伺った。

代表取締役
渡部 智司氏



縁起の良い銘木イチイが 社名の由来

渡部社長の会社創業に至る経歴は挑戦に満ちたものである。松江開成高校を卒業し、下水道会社に新卒入社するも一年ほどで退社。友人と二人で飲

食店サウンドを開店。このお店を共同経営のパートナーに譲って、アルバイトで大工の見習いを始めたのは23歳の時であった。そこで大工の師匠に出会って弟子入りを決意。親方のもとで修業を始めたがもともと器用だったため大工仕事の腕をめきめき上げていっ

た。31歳の時に親方の元を離れて渡部建築として独立し、新築戸建ての現場仕事を始めるようになる。

「自宅のある嫁島町での個人経営での創業でした。この時期は、元請けの担当営業が施主様に褒められるような仕事をしていくようにつとめました」。お



黒と木目を基調としたモダンなデザインのオープンスペースがある邸宅。

かげで腕の良い大工職人として評判を呼んで、元請けからの指名受注も増えるようになった。そして3年後の34歳の時に、屋号をいちい建築へ変更した。社名の由来は「一位の木」の伝説から名付けられた。その昔、鬼神が降伏した標（しるし）としてイチイの木でつくった笏（しゃく）を仁徳天皇に献上したところ、これに感動した天皇はイチイに高貴な木として「正一位」を授けたことから「一位」と呼ばれるようになったという。

「銘木いちいは縁起の良い木とされています。新しい屋号は、このような高貴な木を扱える職人集団になりたいという思いからいちい建築としました」。

いちい建築の仕事ぶりは地元での信頼を得て、請け負う現場の数も増えていった。38歳の時に、個人経営から株式会社に法人登録し、自宅から大庭町に事務所を開いたが、この時期には多くの職人を抱えて、すでに手狭であったという。

「ちょうど下請けから元請けへと事業内容を変えていく手探りの段階で、それだけに人員も増えて、社内の風通しも悪くなってきました」。

折り合いの悪かった当時の役員には辞めてもらい、一時期30人近く抱えていた社員も半数以下に減らすこととなった。

他社では真似できない デザイン性を前面に出す

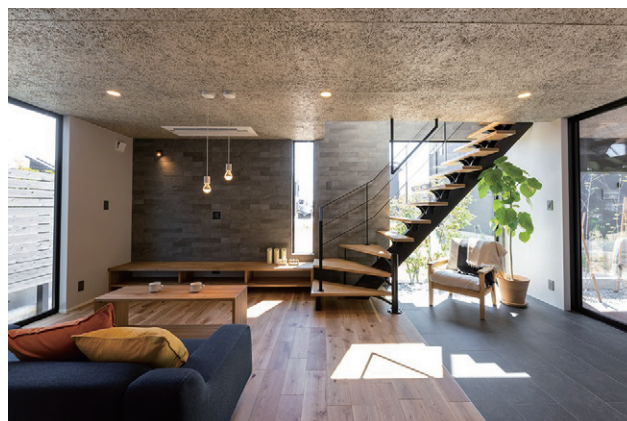
2017年41歳の時に、社名を株式会社いちいへと変え、現在の松江市玉湯町へ社屋を移転したのは、会社として再出発の狙いがあったという。

現在の社員は、渡部社長を筆頭に、総務・経理1名、監督3名、職人3名、営業3名、コーディネーター 1人（ピカイチ社員の女性）に、新卒者を含めて計14名だが、この人数で安定して業務をこなしている。

「社員への指導については現場での仕事をしながらその都度教えていくスタイルで、現場での経験が一番大切で



オープンスペースは開放感と共に遊び心が伝わる。



シックな色合いながら採光性の良い設計で明るい室内を実現。

ある」と考えている。

それ以外は外部の協力会社に依頼しているわけだが、昔から頼んでいる信頼の置ける会社があり、付き合いが長いだけあって現場でのチームワークはとても良いという。

自社のホームページに「松江でデザイン性の優れたおしゃれな戸建て新築を建てるならお任せください!」とあるように、株式会社いちいが手がける建築物で、最も重要視しているのは「デザイン」とのこと。

「基礎やパッシブ工法など一通りのモノは手がけていますが、他社との差別化がしづらいため価格競争になる可能性が高くなります。そのため他社には真似のできないデザイナーズ住宅を前面に押し出しています」。

自社の住宅づくりは、お客様がどのような家を作りたいのか、好みのスタイル、デザインなど大切な内容をヒアリングしながら、一緒に新しい建築物へのイメージを創り上げていく。そして、お客様からの受注後、営業が細かな希望や予算を設定し、設計を起こして、全体のデザインを固めることとなる。ここまでは、ほぼ全ての物件で渡部社長自らが確認とアドバイスをしながら完成させていく。全体の施工計画についてお客様の了承が得られたら、コーディネーターが内装や建具などをお客様と相談しながら決定していく。こうした現在の役割分担がお客様との信頼関係を築



落ち着きと現代の機能性を兼ね備えた和モダンな外観。

くことに役立っているとのことである。

末永く地元で信頼される工務店でありたい

さて、渡部社長が思い描く株式会社いちいの将来像についても聞いてみた。

「お客様が末永く暮らせる安心の住まいを提供し続けることで、地元で信頼される工務店であり続けたい」と願っているそうである。そのために、強靱でしなやかな高耐久資材である木の特性を活かした木造住宅にこだわるとともに、通常10年の保証期間を20年に延ばして、自社独自の「初期保証20年」の保証制度を打ち出しているとのこと。

「ひとつの工務店では住宅20年保証

が限界だと思うが、たとえば木住協のような大きな団体が主導して、会員会社間で引き継ぐ仕組みで、さらなる長期保証制度がつかれないものか」、渡部社長は、こんな思いを木住協に期待しているそうである。

最後に、渡部社長のプライベート面についても伺った。

「常日頃思っているのは、好きな事を好きな時にできるように、仕事もプライベートもメリハリをつけたい」という。飲食店を経営していた20歳代前半の頃にやっていたサーフィンを復活したいし、ゴルフもスコア90を切りたいとのことであった。

Company Profile

【会社概要】

株式会社 いちい
代表取締役 渡部 智司
所在地
松江本社
〒699-0202 島根県松江市玉湯町湯町147-1
TEL 0852-61-0191
出雲支店
〒693-0068 島根県出雲市姫原1丁目5-3
TEL 0853-31-5224

【会社沿革】

2014年5月 いちい建築株式会社設立
2017年3月 株式会社いちいへ社名変更
松江市玉湯町へ社屋移転
2019年1月 出雲支店開業

【事業内容】

一般建築工事・新築工事・リフォーム工事・店舗改装・商業建築・電気事業・不動産賃貸・宅地建物取引業法に基づく宅地建物取引業



広いリビングからは外の景色が一望できる。

ピカイチ社員



設計課 角 美紅さん

Q.入社経緯と現在の業務内容は？

就職活動では、島根の住宅関係の会社で働きたいと希望していました。ホームページでこちらの会社を見つけて、社長が大工さんをやっていたと書いてあったので面白そうな会社だなと思いました。そして、採用欄を見たらコーディネーター募集とあったので「ここしかないな」と思って応募を決めました。新卒二年目ですが、現在は、新築住宅の内装や建具を、お客様と相談しながら決めていくコーディネーターの仕事をしています。

Q.仕事でここがけていることは？

地元・島根でも、デザイン重視のおしゃれな家づくりで評判の会社です。で、コーディネーターとしての経験を積むことで、しっかりとセンスを磨いていきたいと思っています。お客様の希望をよく理解して幾つかのサンプルを

ピックアップする際にも、ご意向に沿ったものが揃えられるように心がけています。将来はプロとしてお客様にしっかり提案できるような信頼されるコーディネーターになっていきたいと願っています。

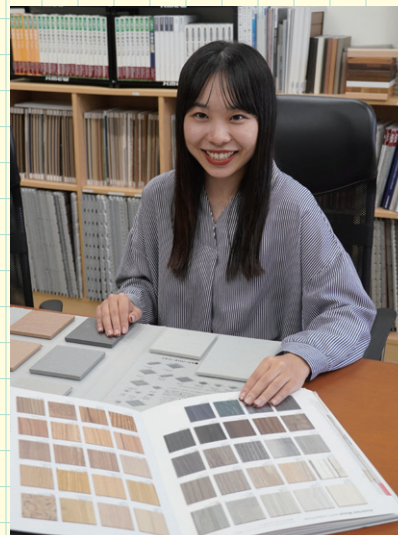
Q.うれしかったことや成功事例は？

最初に内装プランをお手伝いした新築住宅の検査に立ち会った時、私がつくった平面のバースが実際の造作として仕上がった様子を見て、わあ、こんなにきれいになった、と感動したのが印象深いですね。この時は図面を描いただけなのに、お客様からもありがとうという言葉をいただいて、働きがいのある仕事だと感じました。

Q.将来の夢は？

最近、休日にカフェに行くことがあって、やはりカフェの雰囲気っておしゃれだなと感じることがよくあります。異素材の組み合わせだったり、色彩感覚

だったり、私がやっている住宅の造作にもこういう感覚を活かせないものかと、ふと思うことがあります。もっと経験を積んで、周りの世界からもいろんなものを吸収して、「私だったらこういう空間をつくりたい」というイメージを育てていきたいですね。将来、私のオリジナルのプランがお客様に気に入ってもらえて、素敵な住宅が出来上がったら素晴らしいな、と思います。



株式会社 いちいのこだわりPOINT

お客様の希望をデザインに反映できる
技術力とセンスを
社員みんなで磨き上げる

社長のひとこと

信頼される家造りのための専門家集団
として地元で「一位」でありたい



猫と暮らす家を実現したいという
お客様の希望を具現化。





木造ハウジングコーディネーター

木住協NOW
連載

奮闘記



「木造住宅について基本からトータルに学ぶ貴重な経験ができた」と語る住友林業株式会社の中野豊次さん

今回の「木造ハウジングコーディネーター奮闘記」は、住友林業株式会社（本社＝東京都千代田区大手町1-3-2、光吉敏郎社長、1種A会員）の中野豊次さん（58歳）に登場していただいた。この木造ハウジングコーディネーター資格試験で学んだことは、マンション業界からの転職組である中野さんにとって、「木造住宅について基本からトータルに学ぶ貴重な経験ができた」と語っている。

マンション業界から住友林業に中途入社

中野豊次さんは、平成6年10月に住友林業株式会社に中途入社している。それまでの経歴は、マンションデベロッパーとして、東京都内の会社でファミリーマンションやリゾートマンションの企画・開発・販売に従事したのを皮切りに、大阪へ転勤し投資用マンションの販売を担当し、金沢、岐阜などで営業マンとして活躍してきたという。その後、法人向け営業をしていた時期に体調を崩したこともあり、保険外交員の知人から転職を勧められた。そして、その方の紹介で住友林業のOBの方に相談することとなり、これがご縁となって神戸支店長の面接を受けることができ、中途入社する運びとなったそう。

最初の配属は神戸支店戸建住宅営業担当であったが、勤務開始から3ヵ月ほどして年明けに阪神淡路大震災に見舞われ、罹災家屋復旧隊メンバーとして10ヵ月間活動することになった。

「これまでマンション業界にいて、戸建住宅の仕事は初めてだったので、罹災した家屋の復旧支援活動を通して、木造家屋についてのさまざまな知識を得る機会となりました」と、中野さんは語る。

その後、神戸支店のいくつかの住宅展示場・モデルハ

ウスの販売スタッフとして実地の経験を積み、明石営業所の勤務を経て、43歳で姫路支店勤務となった。そして、10年近くいた姫路時代の後半で、まちづくり事業部分譲地担当として分譲地での建売り住宅の営業を経験することとなった。さらに、55歳の時に和歌山支店に移り、現在は和歌山ふじと台分譲地の販売センターに勤務している。

入社10年目に 木造ハウジングコーディネーター 資格試験を受験

一日の仕事の流れとしては、午前8時30分頃に和歌山市内の自宅からクルマで分譲地内の販売センターに出勤する。販売センターの清掃と周辺環境の整備、接客準備のためのパンフレットの整理と朝から忙しい。モデルハウスを見学するお客様への案内がメインの仕事だが、その他にも、資料やチラシの作成、支店内展示場営業担当との情報交換、地元有力企業をはじめ不動産業者廻りも欠かせない。

和歌山ふじと台は、最初の区画販売から20年以上経つ分譲地なので、すでに居住されている方との交流も深

い。居住者からの推薦で新規のお客様が見学に来るケースも多いため、いつも気軽に立ち寄れる「よろず相談所」的な雰囲気づくりを大切にしているそうだ。街区を案内している際も、知り合いの居住者の方との立ち話の中で、買い物はここが便利とか、学校や病院の話とか、いろいろなお話を提供していただけるのが、見学されている方からの信頼感につながっている。中野さんは「地域とのコミュニケーションが分譲地の営業にとっても役立っている」と感じているようだ。

木造ハウジングコーディネーター資格は、2004年度（第4回）に受験している。住友林業では年次毎に順次受けることになっており、会社からの要請でこの資格試験を受けることとなった。入社10年目であり、やはり、中堅社員として、知識の確認や新たな情報収集が必要であるという気持ちもあり、積極的に受験に取り組もうと決めた。

「大阪での二回の講習会に出席した時は、木造住宅の一般知識について細かな所まで解説され、本当にこんな所まで勉強しなければいけないのだろうか」という思いを持ったという。

しかし、マンション業界からの転出組である中野さんにとって、阪神淡路大震災の家屋復旧支援の時に実地で見聞きただけで、テキストを通して基本的にトータルで学んだのは、今回が初めてだったとのこと。

「12月の試験に向けて分厚いテキストをきっちり読み込んでいくうちに、木造住宅について曖昧だった知識がきちんと身に付く感じがして、これは実際のお客様との対応にも自信が持てると感じた」と話している。

資格取得からまもなく20年 更新講習は欠かさずに修了

中野さんは、木造ハウジングコーディネーターの資格取得からまもなく20年が経とうとしている。初回の3年後更新講習会、そして5年毎に行われる更新講習会も欠かさずに有効期間内に修了しており、更新時に送られてくる最新のテキストは、販売センターの机の本立てに置いているという。

大規模な分譲地では、建築工法の違う大手住宅メーカーをはじめ地元の工務店まで、40社近い競合となる。こうした中で、木造住宅をお客様に選んでいただくためには、木造の良さをわかりやすく説得力ある表現で伝えられる基本情報の提供が何よりも大切であると感じる毎日であるようだ。

「比較的年齢の若い見学のお客様には、住宅について

の一般知識からご説明した方が説得力を持つように思う。競合他社との建物の構造の違いなどでは、テキストの図解をお見せしてご説明することもあり、販売のバイブル的役割を果たしている」という。

中野さんが木住協に期待するのは、まさにこのことで、「木造住宅との出会いが自分を成長させていると感じている。いろいろなことをやってみたいと思っているので、資格試験の更新テキストだけではなく、販売の第一線で役立つたくさんの情報を提供してほしい」とのことであった。

中野さんのプライベートについても話を伺った。中野さんの一番の楽しみは、外食店巡りで美味しい食事をいただくこと。お酒は得意ではないけれど、最近は居酒屋の肴にもはまっています、ノンアルコールビールやノンアルコール酎ハイを飲みながらワイワイガヤガヤ親しい者同士で雰囲気を楽しむことも増えているようだ。

趣味は旅行で、なかでも沖縄が大好きで、毎年何度となく沖縄を訪れている。

5年くらい前から2月には、必ずプロ野球沖縄キャンプへ出かけているという。

将来の夢は「60歳までは会社で頑張ろうと思っているが、リタイアした後は、暑い時は北へ、寒い時は南へと、気軽な移住生活に憧れている」とのことであった。



日本の世界遺産 探訪

TOMB OF EMPEROR NINTOKU

「百舌鳥・古市古墳群」は、令和元年（2019年）に日本で23件目の世界遺産に登録されている。百舌鳥エリア（堺市）と古市エリア（羽曳野、藤井寺両市）に築造された49基の古墳で構成され、4世紀後半から5世紀後半にかけて初期の古代王朝が形成されていく過程の遺跡を見ることができる。

今回の世界遺産探訪は、古代古墳の中でも最大とされる前方後円墳「仁徳天皇陵古墳」についてご紹介しよう。

大阪府 仁徳天皇陵古墳

5世紀に築造された古代古墳の中でも最大の方後円墳

「仁徳天皇陵古墳」は、人口80万人を超える大阪府第二の都市・堺市の市街地にある巨大な前方後円墳である。5世紀中頃に築造されたものと推定され、方(四角)形と円形を組み合わせた鍵穴のような形状で、墳墓は全長486メートル、高さ35.8メートル、その外側に三重にめぐらされている濠を含めると全長は840メートルに及んでいる。体積や高さではクフ王のピラミッドや秦の始皇帝陵には及ばないが、広大さにおいては世界最大級の墳墓とされる。

仁徳天皇は、古事記・日本書紀に記されている4世紀末から5世紀前半に実在したと見られる天皇で、応神天皇の第四子とされる。即位後は難波高津宮に遷都して仁政を敷き、聖帝(ひじりのみかど)と敬愛されたと伝えられている。

この古墳の考古学上の名称は大山(だいせん)古墳で、誰の墓かは明らかになっていない。しかし、古事記には「御陵は毛受(もず)の耳原にあり」、日本書紀には「百舌鳥野陵(もずののみささぎ)に葬(はぶ)りまつる」とあることから、宮内庁は第16代仁徳天皇の陵墓として治定している。

明治時代に堅穴式石室内に納められた

長持型石棺と副葬品を確認

宮内庁の管理する天皇陵であるため、外濠から内側は人間の入ることのできない聖域とされており、学術的発掘調査は行われていない。数少ない記録としては、明治5(1872)年に前方部で堅穴式石室に収めた長持形石棺が露出し、石室内に刀剣・甲冑・ガラス製の壺と皿などの副葬品が納められていたことが確認された。また、アメリカのボストン美術館には、本古墳出土と伝えられる細線文獣帯鏡や単鳳環頭太刀などが所蔵されているほ

か、円墳周囲には陪塚(ばいちょう)と呼ばれる、小型古墳10基以上も確認されている。

2021年11月、宮内庁は「古墳の保全工事に向けて堤の遺物を調べるため」として堺市と発掘調査を行ったと



ころ、内濠の堤の内側から円筒埴輪列が見つかった。築造時は堤の両側に埴輪列が並ぶ壮大な姿であった可能性があり、埋葬されている人物の権力の大きさがうかがえる。ただし、この発掘調査

も保全工事に伴う周辺のものに過ぎず、被葬者の謎の解明にはほど遠いのが現状である。

古墳前方(大仙公園側)の中央部には拝所があり、一般の人でもそこから陵墓を拝観することができる。

【仁徳御陵古墳 拝所】

所在地：〒590-0035 大阪府堺市堺区大仙町7-1
電話：072-241-0002(仁徳御陵百舌鳥事務所)
アクセス：JR阪和線「百舌鳥」駅 北西へ徒歩6分

世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」登録概要

構成資産：<百舌鳥エリア> 反正天皇陵古墳、仁徳天皇陵古墳、茶山古墳、大安寺山古墳、永山古墳、源右衛門山古墳、塚廻古墳、収塚古墳、孫太夫山古墳、菟佐山古墳、銅亀山古墳、菰山塚古墳、丸保山古墳、長塚古墳、旗塚古墳、銭塚古墳、履中天皇陵古墳、寺山南山古墳、七観音古墳、いたすけ古墳、善右衛門山古墳、御廟山古墳、ニサンザイ古墳
<古市エリア> 津堂城山古墳、仲哀天皇陵古墳、鉢塚古墳、允恭天皇陵古墳、仲姫命陵古墳、鍋塚古墳、助太山古墳、中山塚古墳、八島塚古墳、古室山古墳、大鳥塚古墳、応神天皇陵古墳、菅田丸山古墳、二ツ塚古墳、東馬塚古墳、栗塚古墳、東山古墳、はざみ山古墳、墓山古墳、野中古墳、向墓山古墳、西馬塚古墳、浄元寺山古墳、青山古墳、峯ヶ塚古墳、白鳥陵古墳

所在地：大阪府堺市・羽曳野市・藤井寺市

記載年：令和元年(2019年)

区分：文化

登録理由：1. 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である
2. 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である

都市型木造5階建て住宅と 団地再生の集会施設の視察で 木造住宅の新たな可能性を現地で体感

コロナ禍で、神奈川支部の研修会や懇親会が開催されず、会員間の交流が盛ならなかったが、今回4年ぶりの研修会を開催した。木住協の会員は、住宅のみならず、非住宅の中低層の木造建築物も建設しており、注目され話題に上る事例も多くなっている。そこで今回は、都市木造の事例であるアキュラホーム（株式会社AQグループ）が建設した5階建て木造住宅モデル棟（川崎市川崎区）と、ナイス（株）（横浜市鶴見区）が施工した洋光台南第一住宅集会所・管理事務所（横浜市栄区）を訪ね、プランナーや設計士にお話を伺い、木造建築ならではのメリットや設計の狙い、そして今後の展開などについてお伺いした。



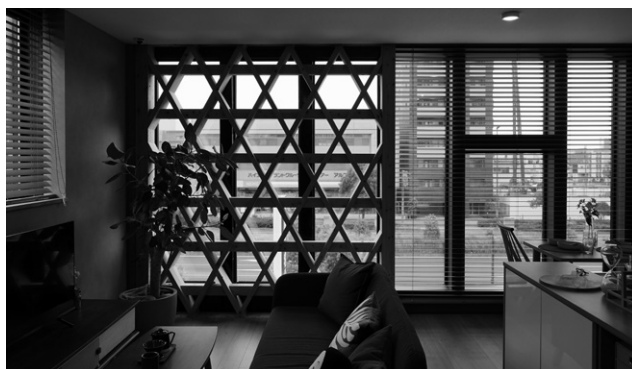
川崎住宅公園にある国内初の純木造5階建てのモデルハウス

今回の現場視察には、大手ハウスメーカーや建材、資材を取り扱う会社のスタッフなど、総勢約10名が参加するなど、新たな木造住宅への可能性に対する高い関心を示すこととなった。初めに訪ねたのが、総合住宅展示場の川崎住宅公園にあるアキュラホームによる国内初の純木造5階建てのモデルハウス。建物の見学に先立ち、建物の計画・設計を担当したAQグループの一級建築士 嶋崎誠義さんをはじめ、設計士の鍋野友哉さん、構造を担当した高橋志元さんが、スライドによる図解などを交えながら建物の構造などを解説。モデル棟の耐力壁は、組子格子耐力壁（壁倍率30倍相当）とCLT耐力壁（同20倍相当）、LVL・合板耐力壁（同20倍と40倍相当）を組み合わせている。いずれも水平力のみを負担させることで、耐火被覆を省略できているとのこと。参加者からは構造だけでなく、どのように耐火基準をクリアしているかなど、詳細な解説を求められる質疑応答も多数交わされた。

座学後は実際に建物を見学。5階建ての建物は1・2階は店舗などのテナントとして、3階は賃貸住宅として、そして4・5階は自身の住居としての利用を想定したもの。耐火建築物だが、組子格子耐力壁とCLT耐力壁、耐火被覆材のLVL（厚さ60mm）は木の現し



純木造5階建てとは思えぬ間仕切りのない広々とした空間



組子格子耐力壁とCLT耐力壁、LVL・合板耐力壁を組み合わせている

となっている。「昨今求められている、SDGsの観点からも環境に配慮した商品であり、今後もさらなる需要が高まると思います」と嶋崎さん。「さらに鉄骨造に比べて3割ほどのコストが軽減でき、一般ユーザーでも少し背伸びをすれば手が届く価格で提供できると思います」。

室内は木造とは思えぬ間仕切りのない広々とした空間やダイナミックな吹き抜け、さらに木造ならではの優しい木の風合いに満たされ、その開放感に参加者も一同驚きを隠せない様子。こちらの5階建てをベースに、現在アキュラホームの本社ビルを8階建ての木造住宅として建設中だそう。RC造の老朽化に伴い、今後増えるであろう雑居ビルの建て替え需要も含めて、今後の木造中高層建築への期待が高まっていることを感じさせた。

川崎での視察を終えると、参加者全員がバスで横浜の洋光台まで。横浜市磯子区洋光台にある築50年、全699戸の「洋光台南第一住宅」の集会所+管理事務所を訪ねた。以前は団地中央部に立っていた高さ40mの給水塔を取り壊し、新たな集会所と管理事務所を木造建築(45分準耐火構造)で建てたもの。鉄筋コンクリートの無機質な団地群において、木質感あふれる木造建築はまさに住民の憩いの場。柱だけでなく現しの梁や壁面を板張りにするなど、木視率を高めることで木の持つ癒やし効果を高めている。さらに連続折れ屋根を採用することで変化に富む印象的な外観を形成しつつ、内部を緩やかに分節しつつ繋がり連続性がある空間に。ひとつながりのオープンな空間でありながら、使い勝手の良い空間に仕上げている。



スライドによる図解などを交えながら建物の構造などを詳しく解説

こちらの計画・設計を手がけたのは株式会社スタジオ・クハラ・ヤギの久原裕さん。設計に際して住民との対話を大切にし、住民の意向を設計に反映させるべくワークショップを何度も開催。建設にあたってはコンペ方式が採用され、団地の住民である管理組合が審査

員となり、このプランが支持されたという。また端材を用いて椅子等を製作するワークショップも実施するなど、住民と一体になった取り組みが行われた。

「コンセプトは住民の共同リビング。公共施設でありながら、我が家のリビングの延長のように利用することで、住民の心にも建物を大切に使用する気持ちが芽生えます」と管理組合の木田進次郎理事長も語る。さらに新たな集会所ができたことで、各種サークル活動や住人の交流が活性化。築50年という年月が経ちながらも、団地の魅力の向上へとつながり、特に子育て世代からの高い評価を得ているという。実際、訪ねた日も多くの子供たちが机でワイワイと遊びつつ、その周囲ではママさんたちが話に花を咲かせるなど、多様なコミュニケーションが見られた。

「この集会所の完成をきっかけに周囲の団地でも集会所の改修が行われるなど、木造建築のこの集会所が団地再生へとつながり、さらに町全体の魅力向上に貢献していると思います」と木田さん。木造の公共的な施設が住民の交流に役立つだけではなく、地域にまでメリットをもたらしたことに参加者は一同納得の様子だった。



株式会社スタジオ・クハラ・ヤギの久原裕さん



緩やかに分節しつつ繋がり連続性がある開放感のある内部空間



木質感あふれる「洋光台南第一住宅」の集会所+管理事務所

資材・技術委員会主催 研修見学開催 時代を超えて、風情を守り、歴史を紡ぐ 八幡市4つの木造建造物を訪ねて

近畿支部では6月20日(火)に京都府八幡市への研修見学会を実施しました。梅雨の合間の晴天に恵まれて見学日和となり、会員各社から18名が参加しました。築289年、重厚な茅葺屋根を誇る「伊佐家住宅」や日本最長級の木造橋で「上津屋橋(通称、流れ橋)」を研修見学した後、午後は特徴的な茶室を配した「松花堂庭園」から現存する最古にして最大の八幡造の御本殿二棟を有する「石清水八幡宮」へと、江戸時代から今に続く4つの木造建築を訪れ、保全と継承について学ぶ一日となりました。

「伊佐家住宅」

江戸時代から続く庄屋屋敷、 重要文化財の中に香る生活の風景

徳川幕府の領地である「天領」を管理する庄屋として江戸時代中期に建築された伊佐家住宅。1975(昭和50)年に主屋と棟札が国の重要文化財に指定され、続いて1980(昭和55)年に蔵や木小屋、宅地などが追加指定されました。

2600㎡の敷地の周囲には石垣と竹林が築かれており、洪水の多い木津川にほど近い立地でありながら、明らかな水害を被ることは一度もなかったという見事な敷地配置。主屋は1734(享保19)年に再建されたものが現存しています。幾度かの改修を経て今なお入母家造りの茅葺屋根を保ち、玄関から座敷に広がる“桃山”の土壁や、豪華絢爛な欄間彫刻、書院造の床の間は江戸時代のままの姿を留めています。

さらに、台所には祭祀に使われた「大くど」や「ぼったん床几」、唐臼や井戸跡などがそのまま良い状態で残り、どこかの扉から男



濠に囲まれた庄屋屋敷



書院風座敷を配した伊佐家住宅

衆(おとこし)や女中さんが出てきそうな気配。時を超えて暮らしの風景がそのまま残されています。

「今はもう茅ではなく葦を使って厚みも薄くなっておりますし、土壁の“桃山”の土も手に入らず、この家の特徴を維持し続けることは容易ではありませんが、できるだけと思い管理しています」と、ご案内くださった伊佐家の方は話されました。



当時の生活道具も残されている台所

「上津屋橋（通称、流れ橋）」 大雨の度に流され戻される構造 名物橋は時代劇の名口ケ地にも

上津屋橋について現地で建設交通部京都土木事務所の前田志朗課長はじめご担当者からお話を伺い、実際に橋を歩いて渡り見学しました。上津屋地域では江戸時代中期から明治の中頃まで、石清水八幡宮

参拝や生活のために、渡し船が利用されていましたが、より便利な往来を求める地域の人々の声から1953（昭和28）年に府道として全長356.5m、日本最大級の木造橋・上津屋橋が木津川に架設されました。

終戦直後で資材がなく、上津屋地区は淀川・木津川・宇治川の三川合流域にあり、たびたび水害を被っていたため、損害の少ない構造が課題でした。この難題を解くべく、橋桁や橋板をワイヤーで連結することで「水位が上がると橋板が川面に浮かび、下流に流出した後、引き戻して元に戻す」という特殊な構造が生まれました。これが最初から流されることを計算して造られた「流れ橋」なのです。

実際、架設以降70年間で24回の流出があり、その度に、引き戻し復元されました。2016年には橋の高さを75cm上げ橋脚の一部に北山杉やコンクリートを使用して補修。その根本的な構造は変えておらず現在に至っています。しかし研修後の8月15日の台風7号



橋脚を見ると上津屋橋が流れる仕組みがよくわかる



普段は通勤・通学や生活道路として利用されている

で流出し、その後、橋脚が燃えるという災難に見舞われ、現在、残念ながら一部損壊した状態となっています。一方で、この欄干や橋上灯のない素朴な木造橋の姿は時代を超える情緒があり、テレビドラマや映画の時代劇の名ロケ地として現在に至るまで約380回もの撮影が行われてきました。

「優れた構造を持つ土木学会の選奨土木遺産でもあり、八幡の風情と景観を守るべき存在でもあります」との前田課長のご説明にもあったように、機能と風情、その両方を維持し続けることは容易ではないことを学びました。



風情を楽しみつつ、流れ橋について研修

「松花堂庭園」

約300年前の文化人・松花堂昭乗の 粹を今に伝える茶室、庭園

江戸時代初期、石清水八幡宮の社僧であり、真言密教の僧として最高位の阿闍梨でもあった松花堂昭乗は書や絵、歌、茶などの文化芸術に秀でた文化人でした。その昭乗が晩年、静かに暮らすために、1637(寛永14)年に男山中腹の泉坊につくった二畳の方丈が「松花堂」です。

今回訪れた松花堂庭園は、東車塚古墳の上に広がる約22,000㎡の庭園。「松花堂」(京都府指定文化財)を移築し「泉坊書院」(京都府登録文化財)や小堀遠州が松花堂昭乗に贈った茶室「閑雲軒」、千宗旦好みの四帖半の茶室がある「梅隠」など三棟の茶室とともに、約40種類の竹、約300本の椿、梅、桜、紫陽花、紅葉な



東車塚古墳の上に広がる松花堂庭園

ど四季折々の花木が楽しめる庭園です。

持ち主が幾度かわりながら現在は八幡市が管理し、京都・洛南の名庭園として、多くの人々が訪れてい



閑雲軒からの眺望を3Dで疑似体験



都林泉名勝図会を見ながら歴史を学ぶ

ます。ここでは、松花堂、泉坊書院の内部を鑑賞し、その歴史を館長・平井俊行氏から伺うとともに、創建当時の風景を3D映像で体験したり、実際に昭乗自ら造園したと言われる庭を散策。文化と建築、造園の深いつながりを感じることができました。

松花堂といえば「松花堂弁当」も有名。昭乗が実際に愛用していた田の字に仕切った箱に着想を得て吉兆主人・湯木貞一氏が発案したといいますが、見ても食べても美しいお弁当を併設のレストランで賞味することができます。

「石清水八幡宮」

日本最古・最大の朱塗の社殿には 左甚五郎一派の彫刻、織田信長の雨樋

1200年にも及ぶ歴史を持つ石清水八幡宮。2019（令和元）年にリニューアルされた美しい参道ケーブルカーに乗り、約3分で山上に着くとそこには静寂の森が広がり、正面参道を進むと、厳肅な佇まいの南総門が見えてきます。その先の絢爛豪華な本殿で出迎えてくださったのは権禰宜・神道尚基氏。本殿を拝観しながら、創建の由来、神仏習合の宮寺であったこと、境内の構成などをお話しくださいました。その中で、現

存最古であり、最大規模でもある壮麗な朱塗りの八幡造の本殿に施された左甚五郎一派の手による繊細な植物や動物の彫刻、そのモチーフの由来などを詳細に説明していただきました。

さらに、1579（天正7）年、織田信長が石清水八幡宮に立ち寄った際に本殿にかかる樋が傷んでいる様子を見て寄進したといわれる黄金の雨樋も間近で見学することができました。宗廟であり、武運長久の神として名だたる時の権力者たちが大切に守り続けてきた歴史のワンシーンが目の前に広がるような経験となりました。



権禰宜・神道尚基氏から創建の物語や変遷について伺う



東門より壮麗な本殿に入る

第34回 幹事・運営委員合同 研修見学会 全国初！ 伝統的工法に斬新な設計法を活かした 徳島県の木造4階建て共同住宅と 愛媛県新居浜市で別子銅山の歴史を訪ねて

近畿支部では6月7日・8日の2日にわたって、恒例の幹事・運営委員合同研修見学会を開催しました。今回の研修地は四国。1日目は徳島市で木造4階建ての県営住宅という日本初のプロジェクトについて研修し、2日目には愛媛県新居浜市で別子銅山ゆかりの展示施設や建築物を訪ねるなど、19名の参加者は住まいとして産業遺産として今に生きる伝統文化を満喫しました。また7日には宿泊先にて、令和5年度第1回幹事・運営委員合同委員会を開催し、今年度の事業計画などが報告・検討されました。

1日目 徳島県営住宅「新浜町団地」

“awa もくよんプロジェクト” 集合住宅に地域貢献や カーボンニュートラルへの展望も

最初に訪れた「新浜町(しんはまちょう)団地県営住宅2号棟」は、徳島市新浜町に2023年2月に完成した木造4階建ての集合住宅。これまで準耐火構造の木造3階建ては数多くありますが、4階建ては全国でも初めての事例です。

新浜町団地は昭和30年代に建設されて老朽化が進んだため、その建て替えを機に地域の多様なニーズに応じる地域貢献施設の整備をも含む“awa もくよんプロジェクト”として2021年に着工され、民間の資金とノウハウを活用するPFI方式で進められました。全27戸で、延べ面積は約1700㎡。中央に鉄筋コンクリート(RC)造のエレベーター区画を据え、その南北に木造区画を連結した形状となっています。



“awa もくよんプロジェクト”で建設された木造4階建て県営住宅

外観にも内装にもふんだんに木を配した「あらわし木造4階建て」は、2050年の「カーボンニュートラル」実現に向けた先進的な木造建築モデルとしても注目を集めています。現地では設計共同体(3社JV)



設計、監理アドバイザーを担当した内野輝明氏

の1社として、また監理アドバイザーとしても活躍された有限会社内野設計の内野輝明社長と、徳島県県土整備部住宅課のご担当者、プロジェクトの経緯や設計コンセプト、実際の構造などについてご説明いただきました。

構造的には、330mm角大断面集成材の柱・梁の軸組構造で、2019年の建築基準法の改正で新たに

定められた「避難時倒壊防止検証法」を用いて主要構造部は75分準耐火構造となっています。木造4階建て集合住宅という前例のないプロジェクトであるため、さまざまな課題やチャレンジがあったそうですが、内野氏は「構造」「耐火性能」「消防」の3つの大きな問題が重なり、特に安全面への配慮が重要だったとして次のように話されました。



配管類を集約した“エコシャフト”

木造の良さを生かしつつ

防火、防災、快適性のための様々な工夫

「木造であるために、ガスや水道の配管が破裂したりすると取り返しがつかなくなりますので、それらをすべて住居の外廊下に設置しました。またそれらを集約した“エコシャフト”という空間を作り、光や風の通り道にもなるという設計です」

「各住戸については耐力壁は確保しながら、制限ギリギリまで開口部を広くとってあります。これは開放的で住み心地がよいだけでなく、火災時の避難路の



確保と、初期から新鮮な空気を取り込み、室内の温度が急激に上がってフラッシュオーバーを起こすのを防ぐためです」。また構造床の上にモルタルを敷いて、火災時に室内の温度が上がりにくくするなど、防火対策に多くの努力が費やさ



室内には徳島県産の杉が多用されている

れたことが分かります。

「開口部や室内にも太い筋かいが入っていますが、これは150×240のヒノキでできており、構造上の重要な役割があります。筋かいと柱を連結する金具なども独自で開発しました」

実際に住戸に足を踏み入れると木の香りと爽やかな空気に包まれます。フローリングやキッチンユニット、カウンターの天板、ブラケットなどには徳島県産の杉が使われ、建具の引手など手に触れる部分にも杉材を配し、住まい全体に木の温かみを感じられるように配慮されています。また構造床と置床の間に空間を設け、巾木の下部にも2ミリのすき間を作っています。これは階下への防音のために、音の衝撃による空気の流れを巾木のすき間から逃すための工夫だということです。

住民や地域のコミュニケーションを促す設計 伝統的なふれあい空間「間の間」の導入も

このような建築構造上の工夫だけでなく、県営住宅として地域の交流やまちづくりに資するための工夫も多くみられます。内野氏自身がこの校区の卒業生であるということもあって、設計JVメンバー全員で地域の暮らしぶりや慣習などを聞き取るフィールドリサーチが行われました。それが設計に活かされた一つが「間の間」の導入。この地域では昔から住人同士が声を掛け合ったり、一人暮らしの高齢者を見守ったりという助け合いとコミュニケーションの場として、住宅の玄関口に「間の間」というスペースが設けられていました。それをこの住宅でも共用廊下と住戸の中間領域として設けたのです。

また建物は2棟が渡り廊下でつながった形となっ

ており、2棟の間は芝生の広場と通り道になっています。ここを通学の子供たちや地域住民が自然と行き来することで、住民と地域の緩やかなつながりを形成し、災害時の助け合いやまちづくりにも活かされるというわけです。

このように、準耐火構造で「あらかし木造4階建て共同住宅」という全国初のプロジェクトは、多くの工夫と巧みな設計によって実現したもので、参加者は興味深く質問を投げかけながら有意義な研修見学会となりました。



住民のふれあいスペース“間の間”

2日目 新居浜市

新居浜市は愛媛県東部に位置する東予地方の中心都市の一つ。江戸時代に開坑した別子銅山の繁栄、住友グループとその企業群の発展によって瀬戸内有数の工業都市となる一方、新居浜ブルーと呼ばれる美しい瀬戸内の海に面した自然豊かなまちでもあります。

研修ではそのような新居浜に息づく近代化産業遺産を訪ね、様々な分野で活躍した先人たちに学ぶことができました。

別子銅山記念館

1691年の開坑から1973年に閉山を迎えるまで283年にわたって約65万トンの銅を産出し、日本の貿易や近代化に多大な貢献をした別子銅山。この記念館は、その偉業を永く後世に伝えるために住友グループによって建設されました。建物は別子銅山守護神が祀られている大山積神社境内にあって、鉱山をイメージした半地下形式。屋根は全面がサツキで覆われています。

館内は住友の歴史から銅山の歴史、地質学や最新の技術が導入された経緯に加えて、そこで働いていた人々の生活を物語るものまで、貴重な資料が実物展示やジオラマなどで紹介されていて、まさに圧巻。ご案内くださった元館長の高橋雅史氏の、静かな中に別子銅山への誇りと思いのこもった説明に、参加者一同は聴き入りました。



高橋元館長の説明に聴き入る参加者



鉱山をイメージした半地下形式の建物



土岐館長から広瀬氏の活躍や歴史的背景の説明を受ける

新居浜市広瀬歴史記念館

別子銅山を通じて日本の近代化に大きく貢献した広瀬幸平氏の旧邸と庭園が広瀬公園として整備され、1997年にその偉業を今に伝える記念館が緑豊かな公園内に建築されました。広瀬幸平氏は外国人技術者の招へいや、作業の機械化、日本初の山岳鉄道の導入などを行い、これによって鉱山運営は飛躍的に効

率化されたと言われています。

研修ではまず初めに、館長の土岐幸司氏から広瀬幸平氏の功績や旧邸と庭園、記念館内の見どころなどの説明を受けて記念館を見学した後、明治10(1877)年に建築された伝統的な木造建築の母屋や、大正～



明治10年に建築された母屋

昭和にかけて整備された庭園、亀池などを巡りました。特に邸宅は伝統的な日本建築様式をもちながらも西洋から輸入されたマントルピースや洋式便器、板ガラスといった当時最新の技術が採用されるなど、広瀬幸平氏の進取の気鋭を感じ取れる研修となりました。



別子銅山鉄道の切通しを再現したジオラマ

日暮別邸記念館

今回の研修で最後に訪れた「日暮別邸記念館」は、明治39(1906)年に住友家別邸として四阪島精錬所を見渡す丘に建築された建物を、往時の姿そのままに



建物の重心ともなっている暖炉のある応接室

2018年、新居浜市内の現在地に移築し、住友の事業のルーツである銅精錬の歴史展示とともに公開されたものです。移築工事には住友グループ20社が協力し、四阪島での綿密な調査に始まり、約1万点の部材の取解き、解体、移築先での土木・基礎工事から骨組み、内装工事まで30か月を要しましたが、日本の近代建築史上貴重な遺産となっています。

設計にあたったのは建築家で住友本店の初代技師長でもあった野口孫市氏。東京帝国大学工科大学造家学科を卒業した野口孫市氏は欧米建築視察の経験などを経て当時、最先端の建築技術を習得しており、日暮別邸はその集大成ともいえる意義深いものです。建物はピンクの下見板を外壁に使った洋館と和館で構成されて地下室を有し(移築は洋館のみ)、建物の中央部には応接室が配置され、その重心ともいえる存在が暖炉と煙突。煙突はこの建物の機軸的な役割を果たしていて、日暮別邸の象徴ともなっています。このような大胆な野口孫市氏の設計は、モダニズム建築の先駆けとも言われています。



館内では銅精錬の歴史をたどることができる

日暮別邸の移築復元工事は、法的には新築扱いとなったため現在の建築基準法で定められた耐震性能や耐久性能が求められ、地震エネルギー吸収パネルを採用するなど最新の建築技術が取り入れられています。また土台、柱材などには地元愛媛県産のヒノキ材が使用されました。

この日の研修では、新居浜の別子銅山の歴史が銅の産出や精錬技術の発展だけでなく、建築をはじめ多様な文化を育んできたことを知ることができました。



モダニズム建築の先駆けともいえる日暮別邸を移築再現した記念館

令和5年度 第2回 幹事・運営委員合同委員会を開催

近畿支部では7月6日(水)、ホテル日航大阪において、本部から加藤 永専務理事と高橋雅司技術開発部部長をお迎えして「第2回 幹事・運営委員合同委員会」を開催しました。

合同委員会は吉岡保樹運営委員長の司会で始まり、初めに古川浩支部長から関西における新しい動きなどを交えてご挨拶があり、本部の加藤永専務理事と高橋雅司技術開発部部長がご挨拶と最近の住宅事情などについてお話しされました。

その後、新旧の幹事・運営委員の挨拶、五所克行事務局長から令和5年度の事業計画について説明があり、最後に新たな試みとして、会員会社各社のトピック

スがプレゼンテーションされました。今回は、大建工業(株)、TOTO(株)、三協立山(株)、大阪ガスマーケティング(株)の4社から、それぞれの社業の紹介、最近の取り組みや新商品開発などの発表が行われ、五所事務局長からは6月の研修見学会の様子が紹介されるなど、新しい企画も盛り込まれた大変興味深い合同委員会となりました。



【古川浩支部長ご挨拶】

先日、路線価の発表があり、近畿地方でも3年ぶりに上昇に転じたという明るいニュースがありました。また2025年に開催される関西万博に向けて大阪の目抜き通り御堂筋が大改造されるなど新しい風が吹いてきたと感じます。恒例の研修見学会でも徳島の木造4階建て共同住宅の現地視察を行うなど、本年度も積極的に最新の技術や情報に触れて、会員各社の社業発展やコミュニケーションに貢献していきたいと思います。



【加藤永専務理事ご挨拶】

専務理事に就任して1か月で、協会として会員会社の皆さんにどのようなお役に立てればよいか模索中ですが、まずは皆さんの声を直接お聞きたいと本日、参加させていただきました。国から国産材の使用が奨励されるなど木造住宅産業にとっては追い風と言えますので、住宅・非住宅を含めた木材の活用を考え、普及していきたいと思えます。



【高橋雅司技術開発部部長ご挨拶】

これまで中大規模建築を専門に携わってきましたが、2000年の法改正で一定の性能を担保できれば木造の耐火・および準耐火建築が可能になりました。これを受けて技術開発部では順次、全国に向けて啓発活動を行っており、すでに440棟の実績を得ています。さらに、公共建築物でも木造が認められるようになりましたので、今後ますます木造住宅の可能性は広がっていくものと期待しております。



北陸支部「令和5年度夏の講演会及び懇親会」を実施

令和5年7月27日（木）、北陸支部はホテル日航金沢にて「令和5年度 夏の講演会及び懇親会」を実施し、14会員会社20名に参加いただいた。同支部が平成30（2018）年7月に設立総会、翌平成31（2019）年3月の定時総会以来、対面での会合が5年ぶりの開催となった。

当日は、令和4年6月就任の竹中 克拓支部長（大建工業（株）北陸支店長）、続いて本部より、令和5年6月就任の加藤 永専務理事から挨拶をいただいた。

講師として金沢市ご出身であり、建築・不動産の開発・再生のプロデュースやデザイン、地域再生のプランニングを実践されている吉里裕也様（建築家 SPEAC代表取締役 R不動産株式会社代表取締役）をお招きして“エリアリノベーション”と題し、吉里様の幅広い視点からの経験実例をスライドを交え解説いただき、参加者は新たな着眼・発想を想起される内容に感銘深く聴き入った。

講演会終了後、同ホテルにて懇親会を行い、幹事である石灰 一友様（石友ホーム株式会社 代表取締役）にご挨拶と乾杯のご発声を、締めのご挨拶は中島 敬司様（三協立山株式会社 北信越支店長）にいただいた。コロナ禍で自粛していた懇親会を久しぶりにを行い、支部会員間での懇親を深めることができた。



「歴史的建築物等」の研修見学会

高山陣屋 2023年7月6日

2023年7月6日の初夏に岐阜県高山市にある高山陣屋を見学した。

主要建物がほぼ当時のままで現存する代官・郡代所跡では日本唯一のものである。もともとは天領になる前の領主金森氏の別宅として建設され、天領になった時にそのまま代官・郡代の役所として利用された。廃藩置県後から昭和44年に役所が移転されるまでの間、県の出先機関としてそのまま使用されていたが、移転後は江戸時代末期の図面をもとに26年かけて当時のままに修復され現在に至っている。

門をくぐると御役所・役宅が目に入り、建物の外観に圧倒されるが、(①)まず目を魅かれるのが板葺き屋根である。瓦を使わず、くれ板と呼ばれる油分を多く含み水をはじくヒノキ科のネズコの板を重ね張りしている。高山の厳しい冬でも割れないよう、また雨や湿気対策を十分に考えた江戸時代の大工の知恵によるもので、風土に根ざしている。

玄関は同じくれ板を利用しながらも「柿葺き」、その他の建物は「半樽熨斗葺(はんくれのしぶき)」という方法が用いられている。

玄関を入ってすぐの床の間には青海波が描かれている。無限に広がる海の波を模した吉祥文様で、江戸の世が未来永劫続くよう繁栄と平和の象徴として



流行したそうで、当時は床の間だけでなく玄関の壁や襖の全面に描かれていた。

江戸から派遣された代官・郡代とその家族にとっては居宅の機能も兼ねており、かなりの部屋数がある。大きな木組みの台所(②)や厠、様々な用途の部屋があった。

最大の部屋は3部屋続きの49畳の大広間で、役人により執務が行われた一方で、多くの年中行事に利用されていた。当時の人間のみならず、現代人にとっても巨大な空間であり、この建物の持つ荘厳さ・威圧感につながっている。

建物内部には御白州もある。罪を犯した人の取り調べや裁きが行われ、いわゆる法廷の役割を果たす一方で、村人からの訴えや願いごとを受ける、今で言うところの役所の窓口という二面性があった。拷問道具も置かれているが、犯罪の抑止力とするためだという。

薄暗い建物内部を歩き続けると、急に明るい縁側に出る。内庭の中に飛騨高山の自然を再現したかのような景色を建物の床、柱、庇が切り取っている。季節ごとに変わる庭の景色を一望できる場所に、当時の役人の休憩場所もあった。(③)建物の周囲には小さな溝がめぐらされており、その水の上をわたってく





る風が冷たく心地よい自然の冷房となっている。

役宅の隣には巨大な御蔵が建っている。こちらの屋根は釘を使わずに木の棒と石で押さえる「石置長樽葺(いしおきながくれぶき)」という葺き方で、役宅と比べると簡素なものとなっている(④)。くれ板を



5年単位で上・下・表・裏を返して20年もの間、利用される。その期間にまた新しい木が育つことで森に新しいサイクルが生み出される。

御蔵は年貢米を収納する米蔵で、幕府直轄領となった直後の元禄8年(1695年)に高山城三之丸より移築された。創建は三之丸が

築造された慶長年間(1600年頃)と考えられ、現存する江戸時代の米蔵(土蔵)として全国でも最古・最大級を誇る。

内部は真夏でも涼しさを感じる。基礎には換気口が作られており、暑さと湿気の多い夏の時期のため石の蓋は外されていた。乾燥し寒い冬場には蓋をし、室温を一定温度内に保つための工夫となっている。

木造建築もメンテナンスをきちんと行えば、何百年も残すことができる好例で、質のいい建物を作ること、建物の寿命を伸ばすことにつながる。木造建築のさらなる可能性を感じる見学となった。

白川郷 2023年7月7日

2023年7月7日、岐阜県の白川郷を訪れた。山深い小さな集落が数多くの観光客で賑わっていた。集落は庄川という川幅40から50メートルはあろうかという大きな川沿いにある。飛騨山系の澄んだ水が流れる急流を眼下に吊り橋を渡るが(①)、駐車場から地続きでない分、集落の秘境感がより一層強まっている。

白川郷は1995年に『人類の歴史上重要な時代を例証するある形式の建造物、建築物群技術の集積、または、景観の顕著な例』として世界文化遺産に登録された。その中心となる合掌造り集落群は荻町地区にある。

飛騨地域の中でも特に山ひだが険しく、その急斜面地の間を縫うように流れる庄川流域の集落で、冬季に積雪が200cm以上になる日本有数の豪雪地帯であったため、周辺との交流ができず、秘境と呼ば



れていた。

集落は合掌造りの家が連なっており、ちょうど屋根の葺き替えを行っている小さな建物もあったが(②)、



茅葺屋根はかなりの厚みがあった。

『合掌造り』とは、木の梁を山形に組み合わせて建てられた日本独自の建築様式で、諸説あるようだが、外から見たその形が、まるで神仏を拝むときの掌を合わせたように見えることから名付けられた。(③)

積雪は200cmにもなり雪質も重いため、茅葺屋根は60度に近い急勾配で、厚みは80cmにもなるが、現在まで人々が住み続けていることから白川郷の自然条件に適合した建物であると推測される。

合掌造りには大型の建物が多く、これは江戸時代中期にこの地域で盛んになった養蚕と深く関わっている。養蚕には広い作業場と多くの労働力が必要とされたため、土地が少ないこの地域では養蚕の作業場を確保するため建物が3層、4層と重ねられていった。また労働力確保のために、長男以外は結婚が許されずに家にとどまり、分家は認められず、他家の女性と内縁を結ぶ通い婚が普通となった。生まれた子供は女性の家で育てるというシングルマザーが当たり前の慣習となることで大家族となり、このことも建物が大型化する要因となった。

これらのことから村は「結」とよばれる組織で団結し、大変な労働力を必要とする合掌造の新築や、30年から50年に一度の屋根の葺替えも、この地域で手に入る材料を使って村中で協力して行ってきた。

さらに山深いこの地で村全体が合掌造りの家に住めるほど豊かであった理由は、養蚕のほかに火薬の原料である煙硝づくりにもあった。家の床下に刈っ

たヒエやヨモギを敷き、蚕糞を混ぜた土に人尿を撒き、数年かけて煙硝土を作り、煙硝土を灰汁で煮詰めることで、純度の高い煙硝ができた。秘境の地だった白川郷は、軍事機密である煙硝生産に最適の土地でもあった。

集落の中でも最大級の建物の「和田家」(④)を見ると、釘や金具を一切使わず、縄を使って独特の縛り方で木と木を組み合わせる工法となっている。丸太と丸太を縄で幾重にも巻いて結合していく屋根組みは(⑤)、骨太でどっしりとして圧巻で、家の中心には囲炉裏が掘られ、その上は吹き抜けになっており、暖気は蚕が育てられていた最上階にまで届くよう工夫されていた。厚い茅葺きは断熱材となり、暖気は外に漏れないようになっている。梁や壁、床などは囲炉裏からの煙でいぶされ黒く光っていた。

村の家々の周りには水路がめぐらされ、小さな水車も回っており、透きとおった冷たい水が生活用水として流れている。山懐に抱かれてたたずむ合掌造りの家々は、周りの自然に溶け込んで、美しくも懐かしい日本の原風景を残していた。



生き生き森の探検隊活動記録

住友林業株式会社岐阜樹木育苗センター

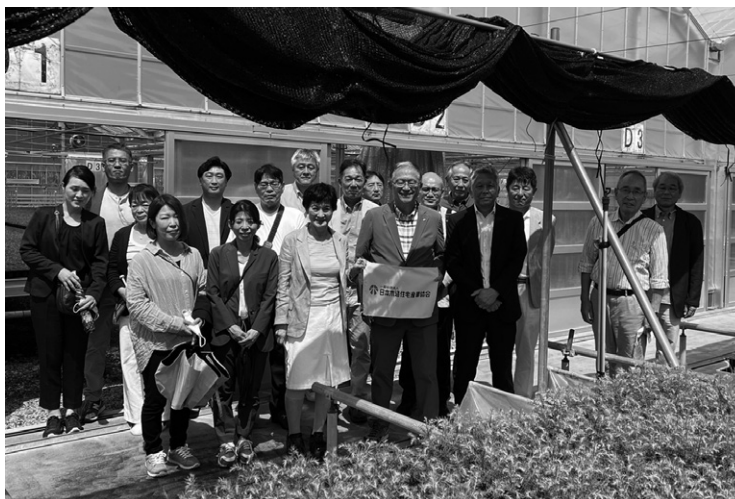
2023年7月6、7日の二日間、3年ぶりにいきいき森の探検隊の活動を再開しました。

森林の循環を支える苗木の生産工場の視察研修を実施しました。

視察したのは、岐阜県下呂市にある住友林業株式会社岐阜樹木育苗センターです。(①)この施設は全国でも珍しく、岐阜県と住友林業が協定を締結し、品質の高い苗木の安定供給体制を構築する目的で整備された施設で、平成29年3月に竣工しました。(②)県が土地を造成し、取水工事まで施工して住友林業に貸し付け、同社が施設(ハウス)を建設、運営しています。現在は2期工事を経て全体で年間40万本の苗木を生産できる体制となっています。将来的に年間100万本の生産体制に増設する予定だそうです。

この施設にはいろいろな最新設備が導入されており、効率的に良質な苗木を生産し年間を通して供給するシステムを整備してきました。

まず種子の選別です。国立研究開発法人森林総



合研究所・九州大学・住友林業株式会社との3者共同開発で開発された技術を使って発芽率の高い種子(充実種子)を選別する近赤外線分光器を導入、発芽率が85%以上と飛躍的に向上したそうです。選別した種子は半自動播種機で発芽床に種播きした後、発芽室(苗テラス)で光と温度を徹底管理して発芽させます。発芽した苗木は人の手によって一つ一つポットに移植され、ハウス内でコンテナ単位で育苗・管理されます。施設内では見学時には3名の女性職員がちょうどポットに移植作業中でした。

ハウスの中では、苗木は人が座って作業ができる高さに置かれ、ムービングベンチと呼ばれる移動可能な作業台で奥へと移動できるため、労働負担が軽減されています。苗木は入り口から奥に行くにしたがって成長したものが並んでおり、一番奥は出荷前の苗木になっています。ハウスはきめ細やかな温度管理をしており、1年弱でコンテナ苗木として出荷できるようになります。

従来の路地で栽培される苗木に比べて、狭い面積で大量の苗木を生産できること、苗木の生育が早いこと、出荷の際に根切り等がなくポット苗木が並んだコンテナのまま出荷ができ労力が軽減できること、一年中必要に応じて品質の高い苗木が出荷できること、植林現場では専用器具を使って簡単に植付けることが可能で、時間の短縮ができること、植付けに熟練技術を要しないなど多くのメリットがあるそうです。出荷には



ドローンが大活躍(③)、コンテナのまま周辺の植林現場へ、片道約4分を何往復もして輸送するそうです。

またセンターでは、国が推進する花粉症対策である、花粉の少ない杉苗の生産量を10年後には苗木全体の9割に引き上げる目標に呼応し、花粉の飛散量の少ない杉品種を選択するようにしているとのことでした。

官民協力のこの施設は、県にとっては県内の林業の発展のために良質の苗を安定供給させる施策の一つであり、同時に借地料の収入源でもあり雇用を生むことなどのメリットがあります。住友林業側にとっては、販売に関しては岐阜県には新規参入ではあるものの、販路の開拓に県の後押しが得られるメリット



があります。加えて事業収益が得られること、カーボンニュートラルに寄与する事業は会社のイメージアップにつながるなど、お互いにWIN-WINの新しい取り組みでした。

Oak Village

1974年、飛騨高山に立教大学の若者がナラ材を主材とした受注生産の家具工房を立ち上げました。彼らは1972年に発表されたローマクラブの報告書、「成長の限界」に強く心を動かされ、「自然との共生」と「循環型社会の構築」という崇高な理念を掲げて「飛騨の匠」の技が伝承されている飛騨の地を選び木工房を設立しました。1万坪の土地を切り開き、田畑を耕し、水力発電装置を導入して電気も自給、水も自給の生活。畑違いの木工に挑むため、飛騨の高等技能専門学校で木工技術の基礎を学びました。専門学校の先生たちは、大卒の5名の若者の本気度を疑って、半年間は道具の手入れのみを教えたのだそうです。しかし、その半年後には彼らの本気度を確信し、朝早くから夜遅くまで徹底的に技術を指導してくれたといいます。1年間の密度の濃い訓練期間の後、家具作りから始めて、やがて建築やインテリア、玩具などの小物まで手掛けるようになります。



国産無垢材をつかった、出来るだけ金具を使わない伝統工法の木組家具と建築に挑みます。創業当時日本では雑木として安く取引されていたミズナラ(Oak)を使って家具作りを始めますが、実は、ナラは成長が遅いため緻密で固く狂いが少ない上に木目の美しさから、ヨーロッパでは高級家具材として使われていました。そして家具の仕上げの塗装にも、オイルと





漆の自然素材にこだわっています。

現在のOak Villageはいくつもの工房(①②)と資材置場に展示室、ショップ、社員の住宅、菅原文太氏の旧宅(③)などがあって一つの集落を形成しています。菅原文太氏はもともと朝日新聞の森林文化協会の会員で、Oak Villageの理念に賛同し初期の苦しい時期には著名人を紹介したり、売れ残りの商品をまとめて買い取ってくれたり、熱心に応援してくれたのだそうです。たびたび工房を訪れるうちに集落の一角に山荘を建て、関東で本格的に農業を始めるまでの10年間この地で暮らしておられたそうです。

Oak Villageでは1年を通して様々なイベントを行っています。集落の周りに自社林がありますが、ここでは森の大切さを知ってもらうための啓発活動や遊びを通しての子供たちの森林教育、活動に賛同してくれる人たちの力を借りて、森林の整備や「森から1本木をもらったら100年後のために1本植える」ための植林活動も続けています。

職人の育成も自社で行っています。卒業生はおおよそ300名を数え、そのまま会社にいる人もいれば、岐阜県内に限らず全国に散らばっているそうです。

今年は創業50年、今も創業時の理念はしっかり受け継がれています。

1. 100年かかって育った木は100年使えるものに
2. お椀から建物まで
3. 子供一人、ドングリ一粒

それに素材、デザイン、技術の3要素を組み合わせ、Oak Villageの経営理念としています。

ショップで売られている家具や小物はデザインはシンプルで無駄がなく(⑤)、どれも木肌が美しく、使い込んでいくうちに木の色に深みが増して存在感のある家具や小物になるのが目に見えるようでした。100年使ってもらうために、

塗り直しや傷などの補修ももちろんしてもらえます。

これまでは地元飛騨の森から切り出したナラなどの広葉樹を使っていましたが、樹齢の長い大きな木が少なくなってきたことから、木材業者のネットワークを使って広く国内から材料を仕入れているそうです。建物に関しては、材料調達に時間がかかることや建築そのものに時間がかかることから、年間4棟くらいがやっとのことでした。

市場に出ない商品にならない曲がった木や節のある木材の利用にも取組み、適材適所に余すことなく木材を使い切ることに力を入れているそうです。

また、全国からノベルティの製造や商品の依頼も増えて、スターバックス高山店でのみ売られているマグカップはショップで売られているマグカップにスターバックス独特のデザインを施したもので人気商品だということでした。

大量生産時代の前の日本で行われていた、自然と共生し、森の恵みを頂いて世代を超えて大切に長く使うという生活のありかたがそのままこの工房にはありました。SDGsが全世界で叫ばれている中、今こそ考え直さなければならない生活そのものの、ものづくりの在り方を考えさせられるとても大切な時間でした。



新規会員紹介

2023年7月から11月までに入会されました企業を紹介します。みなさん、よろしくお願いします。

石橋ホーム資材(株)

2種B正会員

代表取締役 堀元 信剛

建材の販売からリフォーム工事まで取り扱っている会社です。

〒252-0141 神奈川県相模原市緑区相原5-12-1

TEL : 042-773-0125 FAX : 042-773-9535

withHOME Saitama(株)

1種B正会員

代表取締役 長谷部 晴久

『これから毎日、感動の暮らしを続けよう。』『Be Moved.』
新たな住まいに暮らし始めた時の感動が、毎日続けられるように。お客様の暮らし始めた感動が毎日続けられる、「超」高性能×自然素材の唯一無二のお家を創っております。

〒350-2201 埼玉県鶴ヶ島市富士見2-2-10

TEL : 080-1237-8239 FAX : 049-298-3466

<https://withhome.co.jp/saitama/>

CO-Studio(株)

3種正会員

代表取締役 角野 健一

札幌市を中心に新築及び戸建住宅のリノベーション設計を通じて、お客様に豊かな暮らしを提案します。

〒060-0051 北海道札幌市中央区南一条東2-3-2

マツヒロビル6階

TEL : 011-211-0117 FAX : 011-211-1456

<https://co-studio.site/>

(株)さくらトータルライフ

1種C正会員

代表取締役 堀 弘道

不動産全般、土地、賃貸、リノベーション、建売、注文住宅全てワンストップで行っています。

〒825-0002 福岡県田川市大字伊田4-19-1

TEL : 0947-49-0333 FAX : 0947-49-0332

(株)シアーズホームバース

1種A正会員

代表取締役 丸本 文紀

本当に良い住宅、価格以上の価値を持つ住宅を創り、オーナー様に良い住宅に住む喜び、幸せ、満足、そして感動を提供します。

〒816-0911 福岡県大野城市大城2-23-30

TEL : 092-504-6201 FAX : 092-504-6203

<https://fukuoka.searshomegroup.co.jp>

(株)チョープロ

1種B正会員

代表取締役社長 荒木 健治

母体がLPガスの企業だから出来る「炎のある暮らし」をテーマに、災害レジリエンスを備えた安心住宅のご提案。

〒851-2127 長崎県西彼杵郡長与町高田郷6-2-1

TEL : 095-856-8101 FAX : 095-856-0153

<https://chopro.co.jp>

都市環境建設(株)

1種B正会員

代表取締役 菊池 克弘

木造在来工法の一戸建注文住宅の設計施工及び分譲住宅の販売

〒102-0085 東京都千代田区六番町15-2

鳳翔ビル4階

TEL : 03-6261-3863 FAX : 050-3588-1101

ナイスユニテック(株)

1種A正会員

代表取締役社長 遠藤 雅宏

一戸建住宅建築、マンション内装仕上げ工事、木造非住宅建築

〒230-8571

神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央4-33-1

ナイスビル4階

TEL : 045-503-3101 FAX : 045-503-3155

<https://www.nice-unitec.jp>

なかやしき(株)

1種C正会員

代表取締役 中屋敷 知則

住宅の新築工事、リフォーム、住宅資材の販売と施工も行い、総合的に住まいの提案を行っています。

〒871-0802 福岡県築上郡吉富町大字小犬丸121-1

TEL: 0979-24-5177 FAX: 0979-24-5753

<http://www.nakayashiki.co.jp/>**日本リビング保証(株)**

賛助会員

代表取締役 安達 慶高

保証をはじめアフター業務支援や金融サービスの提供により、住販売戦略やC・S・C・R M戦略の実現を支援いたします。

〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-33-4 7階

TEL: 03-6276-5901 FAX: 03-6893-6684

<https://jlw.jp>**HAUS(株)**

1種C正会員

代表取締役 木村 竜也

機能性・デザイン性が高くそれでいてコストパフォーマンスの高い住宅を提供しています。

〒489-0865 愛知県 瀬戸市山口町253

TEL: 0561-56-8033 FAX: 0561-56-8034

光建設(株)

1種B正会員

代表取締役 吉田 光徳

快適な住まいづくりをめざして、プチ・リフォームから増改築・新築工事をご提案します。施工は、自社大工職人にて。

〒969-1164 福島県本宮市本宮字戸崎7-1

TEL: 0243-33-2370 FAX: 0243-33-2380

<https://www.hikari47.co.jp>**三浦工業(株)**

2種A正会員

軟水ライフ統括部 統括部長 木山 明美

企業理念「環境にやさしい社会、きれいで快適な生活の創造に貢献すること」。軟水生活が、新たな差別化アイテムとして住宅アイテムとしてお役に立てること。

〒567-0877 大阪府茨木市丑寅2-4-21

三浦大阪北摂ビル3階

TEL: 072-645-6626 FAX: 072-645-6627

<https://www.miuraz.co.jp>**宮里設計一級建築士事務所**

3種正会員

代表 宮里 愛

木造住宅設計・監理を主とする、個人経営の設計事務所です。

〒866-0082 熊本県八代市大福寺町887-3

TEL: 0965-35-9084 FAX: 0965-35-9084

大和財託(株)

1種A正会員

代表取締役 藤原 正明

三大都市圏に特化した物件開発で、コンサルから管理・保証までサポート。自社設計・施工でニーズを捉えた高品質物件を提供します。

〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町3-1

グランフロント大阪タワーB 35階

TEL: 06-6147-8823 FAX: 06-6147-2103

<http://yamatozaitaku.com>**(株)結プロジェクト**

1種C正会員

代表取締役 酒井 耕介

当社は(株)酒井設計室の建設グループ会社として、木造住宅・非住宅の建設を行っています。

〒445-0877 愛知県西尾市山下町東八幡山102-4

TEL: 0563-54-0163 FAX: 0563-54-0164

(株)リフレ三和建設

1種B正会員

代表取締役 藪内 剛

プラン提案から工事監理まで専任のスタッフが一貫して対応します。住まい方に、より適している環境づくりができたりますようなご提案と丁寧な打ち合わせに努めてまいります。

〒665-0827 兵庫県宝塚市小浜3-11-11

TEL: 0797-84-3434 FAX: 0797-84-5589

<http://sanwa-reform.com>



〈島根県奥出雲町〉

櫻井家住宅

「櫻井家住宅」は、江戸時代におけるたたら製鉄の中心地・奥出雲にある鉄師頭取の屋敷構えを伝える遺構である。櫻井家は、戦国の武将塙団右衛門の末裔家で、大坂夏の陣で始祖討死の後、嫡男直胤が母方の姓「櫻井」を名乗り、三代直重が正保年間に奥出雲領上阿井の地に移り、たたら製鉄を家業とした。屋号を「可部屋」と呼び「菊一印」の銘鉄は最高品質の鉄砲地金として知られるようになり、松江藩から「鉄師頭取」の要職を拝命している。

元文3年(1738)年に竣工された主屋は、切妻造り、桧瓦葺の二階建てで、この地方の豪族屋敷としては大型で上質な造りとなっており、蔵、金屋子神社なども順次建造されたものである。歴代の藩主が巡視の折に本陣宿として逗留しており、主屋に接続する御成座敷は、七代藩主治郷(松平不昧公)がお成りの時に増築されたもので、江戸時代後期の数奇屋風書院の好例を示している。また、御成座敷に面した日本庭園もこの際に造成され、庭園の滝を不昧公が賞賛し「岩浪」(がんろう)と名付けられたといわれている。

2023年夏のTBSドラマ「VIVANT」で「櫻井家住宅」がロケ地となり、それ以降多くの来館者が訪れるようになった。

櫻井家住宅 国重要文化財 県有形文化財

建 築	元文3年(1738)年
所 在 地	〒699-1621 島根県仁多郡奥出雲町上阿井1655
電 話	0854-56-0800
入 館 料	一般 1000円 / 高校・大学生 650円 / 小・中学生 450円
開 館	午前9時～午後4時30分
休 館 日	月曜日(祝祭日の場合は翌日)・12月中旬～3月中旬
所 有 管 理	公益財団法人可部屋集成館

<https://www.mokujukyo.or.jp>



一般社団法人
日本木造住宅産業協会



木 芽

2023年12月5日発行

Vol.186

発行人 加藤 永 編集 業務・広報部
〒106-0032 東京都港区六本木1-7-27 全特六本木ビル WEST棟2階
電 話 03(5114)3010(代) FAX 03(5114)3020